
あの頃の君へ

蒼井 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃の君へ

【Nコード】

N6482H

【作者名】

蒼井 雪

【あらすじ】

すっかり変わった高校の後輩に、七年ぶりに会った葉月。彼は同じ会社で働いていた。

第一話 後輩

雨の降り始めた風景を、走らせてたボールペンを置いて眺める。
七月だというのに梅雨の明けない日々が続いて、湿度の高いオフィ
スの中は眼鏡が曇りそうな気分。

この会社に入社して、もう三年。
早いもんだなあ……と、頼杖をつく。

大学を卒業したのが、そんなに前の事とは思えない。

同期の女の子は、寿退社でいなくなり始めてて。
まだ三年だというのに、総務の中では古参に入る。

うちの会社は、全国に支店を持つ衣料品会社。
本来入社してすぐは店舗勤務になるのだけれど、数人だけ本社の事
務業務に回される。

私もそのうちの一人。

店にいけるって、楽しみにしてたんだけどな。

でも、この仕事も嫌いじゃない。

手元の書類に視線を落とす。

地道にこつこつ、は。

私の得意とする分野。

一つ溜息をついて、ボールペンを机から取り上げる。

さて、頑張ろう。

そう机に向かった時だった。

「すみません、取引先の連絡先を調べて欲しいんですが……」
廊下に面しているカウンターの向こうから、男性社員の声が聞えた。

今、総務には私しかない。

今日は総務自体は休日です。当番制の出勤。

持ち直したボールペンを机に置くと、私はカウンターへと歩み寄る。

「はい、どちらの会社ですか？」

にこやかに笑いながら、彼が差し出したメモを受け取った。

普通の社員にとって、総務とか経理とかは敷居が高いらしい。

緊張しないように、勤めてにこやかに……が総務のモットー！。

受け取ったメモを見ながら、取引先一覧を順繰りにめくっていく。

取引先は大量にあるため、すぐには見つからないのが常。

相手も分かっているのか、黙って私の手元を見ているらしい。

……ていうか、あまり見られるのも嫌なのよね。

緊張するんですが。

やっと目指す会社を見つけて、ほっと胸をなでおろす。

笑顔を浮かべて、相手にそのページを指し示す。

「こちらが連絡先になります。メモを取りますか？」

カウンターの引き出しから、ペンとメモ帳を取り出して渡すと、

何も言わずに受け取った。

あら。お礼くらいないのかしらね。

しかも、メモを取るわけでもない。

眉をひそめて、顔を上げる。

・・・？

なんだろう。なんか見られてる。

慌てて、視線を手元に戻す。

なんだかよくわからないけれど、見られてるんですが……？！

それでも彼が動き出さないの、小さく溜息をつくと意を決して顔を上にあげた。

「あの、何か？　どうかされましたか？」

私の言葉に、はじかれたように一瞬目を見開く。

何？

こっちがびっくりして口を閉じると、相手が伺つように私を覗き込んだ。

「あの、葉月先輩？」

「は？」

いきなり名前を呼ばれて、首を傾げる。

誰だろう、この人。

なんで、私の名前知ってるの？

苗字なら、ネームつけてるから分かるけれど。

「あの、どちら様ですか？」
いぶかしげな表情は、仕方ないでしょ？
だって、こんな人知らない。

途端に、私の肩をがしつと掴む。

「葉月先輩だ！ 先輩、ここに勤めてたんですか！」
がしがしと身体を前後にゆすられて、頭がくらくらしてきた。

おゝい、私が置いてけぼりだよー。

「いや……だから誰……？」
何とか言葉を紡ぐと、彼はやっとまともに私の声を聞いたらしい。

「伊吹です、伊吹義孝！ 覚えていませんか？」
い……いぶき……？

視線を天井辺りでさまよわせる。
伊吹……って。

一人該当者がいるんだけど、こんな奴じゃ……

悩んでいる私に、トドメの一言。

「高校の後輩だった、伊吹です。葉月先輩、俺の事忘れちゃいました？！」

そう笑う彼の顔に、思い出の中の伊吹だったはずの表情がかすかに見て取れる。

でも……

マジですか……？

「おい、伊吹。お前、総務で何やってんだよ」

ありえない状況に頭を片手で押さえていた私の所に、この社員……伊吹を呼びに誰かが総務に入ってきた。

「あれ、田所さん」

その声に、入ってきた社員の方に目をやる。

そこには、同期入社の田所君が立っていた。

「お前、何こんなところで迫ってるんだよ。恥ずかしい奴」

私の肩に両手を置いたままの彼は、そういわれて気づいたらしく腕を下ろした。

「違うんですよ、田所さん。こんな所で、高校の先輩見つけちゃって」

そのまま、私に視線を移す。

「なんだ、宮下じゃないか。こいつ、知り合い？」

まだくらくらしている私は、顔を押さえていた手を外すと、田所君を見上げる。

「田所君こそ知り合い……？」

田所君はがしつ……と伊吹の頭に手を置くと、にやつ……と笑う。

「こいつ今年の新入社員。店舗行かずに、俺んこのシステム管理課に来た奴」

「俺だつて、店に出たかったですよ」

その手をどかしながら、伊吹がむうっ……と頬を膨らます。

そんな二人をぼやっ……と見ていたら、田所君が私のほうを向いてカウンターに手をついた。

「今日の終業後、飲みに行かね？ こいつ連れてくし」

「えっ……ご遠慮させて……」

慌てて断ろうとした私の言葉を、伊吹のでかい声が遮る。

「いいっすね！ じゃあ、迎えに来ますから葉月先輩！」

その音量に耳を押さえていたら、総務の電話が鳴り出した。

「あっ……」

電話のほうに振り向くと、手を伸ばして受話器をとる。

社名を言っつてボールペンを取ると、そこにメモ帳が出てきた。

「？」

隣には、伊吹の姿。

さつき手渡したメモ帳を、置いてくれたらしい。

耳で電話の内容を聞きながら伊吹の方を見上げると、男2人は手を振ってカウンターの向こう、ガラス扉から廊下へ出て行ってしまった。

「あー」

思わず出た声に、電話の相手が怪訝そうに私に話しかける。

慌てて謝ると、相手の用件を済ませ電話を切った。

メモ帳から書いたページを切り取り、ゴミ箱に捨てる。

自分のデスクに戻って、溜息をついた。

一気に疲れた……。

カウンター越しの伊吹の姿を思い浮かべる。

でかい身長、でかい身体、でかい声。

・・・あの頃と同じなのは、でかい声だけね……。

もう一度溜息をつくくと、ボールペンを手に取る。

ああ、あんまり思い出したくないのにな。

ぺらりと、机の上の書類をめくった。

第一話 後輩（後書き）

新しいお話を始めました。

今回は、七年ぶりに会った先輩後輩の二人のんびりと更新していこうと思います。

想いの行方と想いはあの場所でお読みくださった方はあれ？ と
思われたかもしれませんが、同じ会社内の人たちになります。

こういうの、好きなんですよね（笑

いろいろリンクさせてくの。

やりすぎて、自分が分からなくならないように気をつけないとです

^^;

次回更新は8月13日 木曜日になります。

よろしく願います。

第二話 変わり方に戸惑う

「落ちましたよ！」

風紀委員会からの帰りの廊下、突然後ろから叫ばれて振り向く。

そこには、小さな男の子が一人。

私に向けてボールペンを突き出していた。

「あら？」

書類に引っ掛けておいたボールペンがないことに気がついて、その子の手からペンを受け取る。

「ありがとう」

にこつと笑うと、彼は嬉しそうに頷くと、

「じゃ、失礼します！」

そう叫んで廊下を走り去っていった。

その後姿を見ながら、隣を歩く同じクラスのもう一人の風紀委員、柳沢君を見る。

「なんだか……、声の大きさと身体の合わない子ね？」

そう言いながら再び前を向いて歩き出すと、柳沢君は少し笑いながら私を見た。

「なんだ、宮下。あの子知らないのか？」

意外そうな声に、首を傾げる。

「有名なの？」

全然知らない。

柳沢君は笑いを納めると、息を吐く。

「一年の伊吹 義孝だよ。身長百六十cmそこそこだし、声は可愛いし、中学生みたいだっってなんでか同学年に結構人気あるんだぜ？」

俺、同じ部活なんだ」

ふうん……と相槌を打つと、でも……と口を開く。

「そりゃ、三ヶ月前までは中学生だったんだから仕方のないことなんじゃないの？本人も気にしてるだろうし、その人気ってどうなのかしらね」

私の言葉に少し驚いたように目を見開くと、うぐんと唸る。

「まあ、確かにな。男に可愛いのは、いい褒め言葉じゃないか」

そう呟く彼に、同感とばかり頷いて教室へと戻った。

それから。

会うたびに話しかけられるようになって、夏頃には自他共に認める仲の良い先輩後輩という間柄になった。

呼び名も、宮下先輩から葉月先輩へ。

伊吹君から、伊吹へ。

秋頃、なんで私に懐くのか聞いてみたら彼は嬉しそうに笑った。

「柳沢先輩から聞いたんです。初めて葉月先輩に会った日に、あなたが僕の事をなんて言ってくれたか。」

すぐには思い出せなくて。

やっと、あの「仕方ないことなんじゃないの……？」の発言に行き着く。

彼は、とても嬉しかったと息巻いて話してくれた。

この歳で声変わりもしていない自分を、仕方ないと、いとも普通の

事のように言ってくれたことが。

そう笑う彼の顔は、十六歳とは思えないほど幼くて可愛らしかった。

「それがねえ……」

高校時代の回想から覚めた私は、小さく呟いた。

目の前で私達の昔話を田所君に楽しそうに話している声は、あの頃とは比べ物にならないほど低い声で。

可愛らしかった顔は、面長の青年の顔で。

百六十cmなかった身長は、少なくとも百七十cm後半だろう。

髭の剃り跡とか、……ああなんか見たくなかったなあ……。

「って、聞いてます？ 葉月先輩」

突然名前を呼ばれて、一瞬どもる。

「え、うん……うん。聞いてるわよ」

とりあえず答えながら、いったい何の話をしていたのか聞かれないようににっこりと笑う。

「怪しいなあ。多分上の空ですよね、田所さん」

「うん、そうだな」

隣の田所君に同意を求めながら、伊吹は私のほうを見た。

ごまかせないか……と溜息をつくど、じろりと伊吹を睨みつける。

「だって総務の前であんなおっきな声で、叫ぶんだもの……」

終業後、本当にこの二人は連れ立って総務までやってきたのだ。しかもガラス扉を開けながら、「は〜づき先輩、お迎えですよ〜」なんて、のんきに叫びながら。

おかげで電話中だった相手先に大笑いされて、思いっきり恥をかいた。

明日、総務でばらされなきゃ良いけど。思い出して、またがっくりと肩が落ちる。

「すみませんって言ってるじゃないですか。だから今日は、俺のおごりと言うことで。」

ホントに悪いと思ってるのか分からない表情で、私を見るから。なんだか余計に文句を言いたくなるんだけど。

田所君もいることだし……と、諦める。

なんだか伊吹、変わったな。

見た目だけじゃなくて、性格も。

明るくて無邪気な可愛い子だったのに。

確かに明るいし話しやすい雰囲気だけど、なんだろう。

私に対する話し方とか、なんだか立ち位置とか、以前と違う。

前は、先輩として扱われてたと思うんだけど、なんか今のこの状況。先輩というか、仲のいい年上の友達みたいな感じ？

覚えている扱われ方じゃなくて、少し戸惑う。

そんなことを考えていたら。

「いやー、高校時代の力の上下関係が垣間見れるな」
なんて、田所君が笑いながら言い出して。

「でしょ？ 葉月先輩、それはそれは強かったですよ。精神的に。
いや、あの頃の俺なら体力的にも負けてたかも」
人差し指を立てながら、伊吹が笑う。

「そんなわけないでしょ。」
頬を膨らませて奴を見ると、伊吹は立てていた人差し指で私の頬を
ぶにゅと押した。

「葉月先輩、可愛いですねー。」

「……！」

擬音が耳に本当に聞こえるものなら。

きつと私の背後には、ボンツ という音が響いてただろう。
見る間に顔に血が上っていく。

「あはは、真っ赤になってる。田所さん、可愛いですよ？ 葉月先
輩」

「おお俺、宮下のこんな顔、初めて見た」

顔が熱い。

きつと、本当に真っ赤。

こんなこと、前の伊吹ならしなかったのに……！

「伊吹に、可愛いなんて言われたくない……」

グラスを両手で握り締めながら呟くと、得意そうに胸をそらして伊吹が笑う。

「今の俺なら、おかしくないですからね」

普段見られたことのない顔を同期に見せているだけでも恥ずかしいのに、過去の自分を知っている奴に見られることが本当に恥ずかしい。

ぷいっとそっぽを向いて、グラスを一気にあおる。

冷たいアルコールが、喉を勢いよく流れていく。

「葉月先輩、一気飲みは身体に悪いですよ」

そう言いながら私の手から空のグラスを奪うと、自分が頼んでいた烏龍茶のグラスを握らせる。

いらないうって返そうとしたけれど、確かにアルコールにあまり強くない私には今の飲み方はよくなかったようだ。

胃がかあつと熱くなる。

握らされた烏龍茶を、これまた勢いよく喉に流し込んだ。

そんな私達を見ていた田所君が、思いついたかのように手をぼんと打った。

「ああ、高校時代付き合ってたとか言う奴？」

「!？」

そっぽ向いてた顔を田所君に向けて、勢いよく顔を振る。

「ない！ それないから!!!」

「またそんな一刀両断に」

寂しそうに伊吹が肩を落とすけれど、そこはきちんとおこなければ。

「ただの後輩、ただの先輩。田所君が思う様な関係じゃないからね」

「でも、俺は好きだったんですよ。葉月先輩の事」
「は？」

田所君と二人で、伊吹を見つめる。
今、なんと？

呆けてる私達の顔を交互に見て、だから・・・と口を開く。
「高校ん時、俺、葉月先輩の事好きだったんですって」

第三話 あの頃の気持ち

え……？

口をぽかんとあけて奴を見る私は、傍から見たらとても滑稽だったろう。

それほど、思ってもみない告白だったのだ。

伊吹はそんな私の顔を面白そうに見ながら、田所君の方に向く。

「でもね俺、身長も葉月先輩より低かったし、声も高かったし。なんか言い出せなかつたんですよ。一年のうちにでかくなんねえかなーって思ってたんですけど、それも無く。で、先輩は卒業しちゃってそれっきり」

肩を竦めて、なんでもないように笑う。

私はその顔を見ながら、やっと思考が動き出した。

一息つく。

何を私はうるたえてるんだろう。

ただの後輩の言葉に。

そう、ただの後輩。

昔、私のことを好きだったって言っただけ。

今の話じゃない。

二歳も年上の私が、伊吹の言葉に動揺してどつする。

目を深く瞑って、再びあける。

「なんだ、その時に言ってくればよかったのに。私も結構気に入ってたのよ、伊吹のこと」

なんでもないように、伊吹を見る。

奴は、少し面食らったように私を見つめた。

「おっ、告白？ 何、俺邪魔？」

田所君が楽しそうに私達を冷やかす。

私は頬杖をついて、新しく来たお酒のグラスを口に運んだ。

「何言ってるの、これは昔の話。もう終わったことだから、伊吹も私も口に出せるのよ」

ね？ と伊吹を見ると、なんとなく複雑そうな表情をしていたけれど、一瞬のうちに笑顔になる。

「なんだ残念、言っておけばつきつき楽しい高校ライフが待ってたんですか。」

「ま、後の祭りね」

軽く笑う。

そこで腕時計に目をやると、既に十時に差し掛かっていた。

「私、そろそろ帰るわ。伊吹、ご馳走様」

鞆を持って立ち上がる。

座敷に座っていたから、少し足が痺れてる。

同期同士なら笑い話にするんだけど、後輩の前。

絶対、顔にもださない。

唇を噛み締めて歩き出すと、ぐいっ……と左の手首を引かれた。

「え？」

とすん、と座敷に座り込む。

「送りますよ、葉月先輩。じゃ、田所さん、お開きにしましょうか」
よくわからず、伊吹の方を見る。

伊吹は傍らに置いてあったスーツの上着と鞆をつかむと、田所君を促した。

「なんだー、もっとお前らの話聞いていたかったのになあ。宮下の新事実をたくさん知れて、面白かったー」

「また、飲みに来ましようよ。ね、葉月先輩」

少し不満があるのか、田所君は口を尖らしていたけれど、息吹の言葉に気を取り直したように立ち上がる。

私はというと、恥ずかしながら座り込んだ格好のまま、二人を見上げていた。

「ほら、帰りますよ」

手を引かれるまま座敷を降りる。

そのまま伊吹は会計を済ませると、店の前で田所君と別れた。

送り狼にはなるなよーという、ありえない言葉を置いて。

伊吹がどう送り狼になるといつのだ。

私に対して。

第四話 憧れと親しみ

「さ、行きましょ？」

くんつ……と掴まれていた左手を引かれて、2・3歩、足を進めて立ち止まる。

いやいや流されちゃいけない。

「手、離して。一人で歩けるから。」

力任せに振りほどいてみたけれど、びくともしない。

伊吹は面白そうに私を見る。

「足、痺れたんでしょ？ さっき、立ち上がった時おかしな歩き方してましたよ。」

かあぁっ……と、顔に血が上る。

見てない様で見ていて。

気づいていないようで気づいてて。

そう言えば、こういう奴だった。

平気を装った自分が、凄く恥ずかしい。

でも、昔の伊吹ならこんな風に言わなかったのに。

「さっきはね。今はもう大丈夫だから」

嘘をついても仕方ないとばかりに、言い捨てる。

それでも離さない伊吹を睨み上げると、気づかない振りをしているのかそのまま強引に手を引いて歩き出した。

「わわっ、ちよっと……」

驚いて手を振り回そうと思ったけれど、人通りの多い繁華街。

ある意味、そんなことをしている方が恥ずかしい。そう思い直して、振りほどくのを止めた。

だいたい伊吹、見てくれも変わったけど性格も変わりすぎ。こんなに強引じゃなかったはず。

大人しく歩き出した私を見て、伊吹は目を細めた。

「なんだか、葉月先輩イメージ変わりましたね」

「え？」

脳内で伊吹に対する悪口雑言を紡いでいた私は、いきなりの言葉に聞き返す。

「なんだか、あの頃は凄く大人っぽく見えたけど。大人になった今は、なんか子供っぽい」

「なによそれ」

背の高い奴の目を、懸命に見上げながら睨みつける。

「そんな表情、あの頃見たことなんてなかったですよ。俺」

そんなって……

そうだったけ？

なんだか淡い思い出の……というか、その中の人物がこんなにも変わってることの方が、私の変化より凄いと思うけれど。

首をかしげながら考えていたら、伊吹は楽しそうに笑った。

「あの頃は先輩後輩の仲でしたけど、やっと同じ立場に上がったって事ですかね？」

「……今も、先輩後輩だと思えますが？」
少し冷たい口調で返したら、得意げに言い返される。

「大人になったら二歳位の違い、なんでもないですもんね」

それに……と、言葉は続く。

「あの頃より背も伸びたし、声も低くなっただし、何とか男っぽい顔
になれた気がするし。成長したでしょ？ 俺」

その言葉に、つい噴出す。

「何そんなの自慢してるのよ。見た目は大人になっただかもしれない
けど、中身は変わらないわね」

大人になったでしょって自慢する大人が、どこの世界に……

肩を震わせて笑いを抑えようと必死な私を、伊吹は足を止めて見下
ろした。

そのまま動かずにいるから何事かと思って顔を上げると、満面の笑
みの伊吹と目が合った。

「葉月先輩、やっと笑った！ ずっと不機嫌そうだったから、俺、
どうしようかと思って……」

伊吹の言葉に、笑いが収まる。

そ……そうだったっけ……？

なんかずっとイライラしていたといえばそうかも……。

だって、もう何がなんだか分からない一日で。

でも、年下に気を遣わせたことはいけないことよね。

「ごめん。あんまりにも変わった伊吹に、戸惑ってたのかも。驚いちやって」

それに……

可愛い伊吹はそのままのイメージで持っていたかったな〜なんて。

言えないか。

本人は、成長して喜んでるのに。

伊吹は握っていた私の手を離すと、両肩をぎゅっと持つ。

「俺、葉月先輩にいつか会いたいって思ってたんです。あんな俺を、特別じゃなく普通に扱ってくれた先輩に。だから俺、本当に嬉しくて」

無邪気だな〜

こんなに素直に気持ちを言われることなんて、大人になった今はあまりない。

そんな恥ずかしいことを、この道の往来で。

学生時代の友達と社会に出てからの友達って、なんか違う気がする。

周りの視線を気にしつつ、伊吹を見上げた。

「そう？ そう思ってくれてたなんて嬉しいわ。本当に成長したものね。言われなきゃ分からないくらい、男の人」
そこで、人差し指で伊吹の口を指差す。

「口も上手くなってるし手も早くなってる気がする。なあに？ そんなところも成長の一環？」

スキンシップ多すぎ。

さりげなくやってるんだつたら、場数ふんだんでしょうね。

あんなに可愛かった子が、……なんだかお母さんみたいな心境だわ。

私の言葉に慌てて肩から手を外すと、ぷいっ……とそっぱを向いた。

「別に、そんなことないです」

その態度に、口端が緩む。

あら、可愛い。昔みたいないな伊吹だわ。

こんなところは変わってないのね。

「無意識ならもつと凄いわね。新人さんは飲み会が多いでしょうから、好きな子以外にあまりしちゃ駄目よ？ 社内恋愛ならまだしも、社内の愛憎劇は見たくないからね」

そっぱを向いていた伊吹の視線だけ、私の方に降りてくる。

「なんか、母さんみたい。」

その言葉に、思わず噴出す。

「私も今、可愛がってた子供を手放す母親の気分って思ったわ」

お互いに目を合わせて、笑い合う。

そんな私に、前触れもなく伊吹の顔が近づいた。

「でも。さっき俺の事気に入ってたって……あれ嘘でしょ」
何事かと思った、私の動きが止まる。

「…………え？」
私が聞き返すと、伊吹のまっすぐな視線とぶつかった。
「好きの気に入ってるじゃなくて、気に入ってる後輩……位の意味ですよ」

伊吹から目をはずして、道路を見る。

「凶星？ 可愛い後輩くらいだったと思いますよ、葉月先輩の俺への態度って」

責められている言葉なんだけど、口調はとても優しく促されるように口を開く。

「でも、気に入ってたのは本当なんだけどな」

私の言葉に、彼は爽やかに笑う。

「やっぱりな、おおかた田所さんに対して先輩だった自分を見せたかったか、俺に対して先輩風を吹かせたかったか。ま、いいんですけどね」

伊吹の言葉に、どんどん肩が落ちていく。

言葉はきついけれど、確かに言っている事はあってる。

「ごめんね…………」

私が謝ると、伊吹は首を横に振った。

「俺もね、葉月先輩を好きだった気持ちって、多分大半が憧れで占められていたように思えるし」

だからお互い様です、と笑う彼は、大人の男の表情だった。

第五話 昼下がり

「こんにちは、今、昼飯ですか？」

のんびりとした空気の流れる、午後二時の社員食堂。

既にご飯を食べている人もいなく、社員食堂のおばちゃんも帰宅後。

仕事が長引いて、買ってきたパスタを食堂の窓際の席でつついていたら。

ドアから伊吹が入ってきた。

「伊吹も？」

私の言葉に頷いて、目の前の椅子に座る。

手に持っていた袋からは、お弁当三人前。

「なあに、他に誰か来るの？ 凄い量ね」

しかも脂っこいボリューム満点のものばかり。

伊吹はその内の一つの蓋を開けて、これこそガツガツ……といわんばかりに食べ始める。

「いえ？ 全部俺のですけど」

「全部……」

なんだか見ているだけで、胸焼けしそう。

フォークでパスタを巻いて、口に入れる。

冷製パスタのさっぱり感が、口の中だけじゃなく胸焼けしそうな気分まで洗い流してくれる。

つい、ほう……と溜息をついた。

たったこれだけの時間で一つ目を食べ終えた伊吹は、既に二つ目のお弁当にとりかかっている。

若いつて凄いわ。

妙なところに、感心してしまう。

「そういえば伊吹って、もてるのね」

ふと思いついて話し出すと、ご飯を口に詰め込んでいた伊吹が箸を止めて私を見た。

「なんです？ それ」

私はフォークに巻きついていたパスタを口に入れると、右手の人差し指を伊吹に向けた。

「伊吹が総務に遊びに来るようになったら、まあ私への質問が増える。伊吹さんって付き合ってる人いるんですか、ですって」

からかうように笑うと、少し照れたように視線を弁当に戻す。

「あら、照れてるわ。可愛い可愛い」

手を伸ばして軽く頭に触れると、口に箸を突っ込みながら私を睨む。

「別にそんなことないですよ。珍しいんですよ？ 総務って男いないから」

口を動かしながら話す伊吹の前に、後ろのサーバーからお茶を湯飲みに入れて置く。

「総務社員が飢えてる様に言わないでくれない？ いるわよ、男なら1人」

置いたお茶を軽く会釈して飲み干すと、伊吹は首をひねった。

「いましたっけ？」

その言葉に、頷く。

「物凄い愛妻家の、うちの部長」

空になった湯飲みにお茶を入れて伊吹に手渡すと、苦笑いの表情。

「部長つて、家庭持ちの50代じゃないですか。さすがに恋愛対象じゃないでしょ？」

「まあね、でも人気あるんだから。やっぱり優しい人が一番よね」

伊吹は、ふうん……と相槌を打ちながら3個目の弁当の蓋を開けた。

「あ、で？ いるの？ 付き合ってる人。皆に聞かれて面倒だから、適当に答えておくからさ」

「いませんよ。でも、……好きな人はいたりします」

少し躊躇して、伊吹は言葉を続けた。

それだけで、本当の言葉なんだな……と伝わってくる。

なんだか他人の恋愛事情つて、悪いけれど好奇心を刺激されるのよね。

相手の事聞きたいけど、そこまでは駄目だろうな。

「分かった。ま、頑張つてね。誰かは聞かないからさ、付き合えたら教えてね」

自分の湯飲みのお茶を飲みながらにっこり笑うと、伊吹は私を見て眉をひそめた。

「……面白がつてるでしょ」
「……面白がつてるでしょ」

つい、顔がにやける。

「ごめん、ばれた？ だって子供を嫁に出す母親の気持ちなんです

もの」
あんな可愛かった子が、好きな人はいたりしますって……頬が緩むわ。
そんな私にふくれつつらをしながら、最後のおかずを口に放り込んだ。

「ホント先輩、性格変わりましたね」

ぶすつとして言う伊吹が可愛い。

顔は大人になっても、やっぱりあの頃の記憶があるから駄目ね。

ニヤニヤしながら彼を見ていたら、食堂のドアが開いて田所君が入ってきた。

「おい伊吹、さっきのデータのバックアップととけてよ。部長が呼んでるぜ？」

「あ、はい！」
伊吹は小さく溜息をつくとき、お弁当のゴミをビニール袋にしまいこむ。

そして私のゴミもそこに納めると、にっこり笑って立ち上がった。

「じゃ、葉月先輩」

「頑張つてね、……いろいろと」

少し含む言い方をする私に苦笑いしながら、ドアから出て行った。入れ替わりに田所君が、伊吹の座っていた席に着く。

「今頃飯かよ、宮下」

手に持っていた缶コーヒーのプルトップを空けて、一口飲む。
私はそんな田所君を見ながら、湯飲みのお茶をすすする。

「昼休憩の直前に急ぎの仕事が入っちゃって。仕方ないでしょ」

背もたれに寄りかかりながら相槌を打つ彼は、食堂のドアに視線を移す。

「伊吹さ、あいつお前の事好きなんじゃねえのかな」

……

「え？」

いきなりの言葉に聞き返すと、田所君は私に視線を移して言い直す。

「実はまだ片思いの延長だった……とかさ？」

「もう会わなくなつて七年も経つてるんだよ？　ないでしょ、そんなの」

両手を振って否定する。

田所君は、納得いかない雰囲気で見える。

だって伊吹には好きな人がいるんですもの

って言いたいけど、可愛そうだから内緒にしておこう。

「もしそうなら、あんな普通に話してないって」

「そうかなあ」

それでも腑に落ちない表情の田所君に、話を変えようと話題をふる。

「そつえば伊吹って仕事どうなの？　役立ってるの？」

田所君や伊吹のいるシステム管理課は、この会社の中枢といつても過言じゃない。

この課がもし稼働しなくなったら、店舗業務も本社業務も全て動かなくなってしまう。

そんな中に、入社したての彼が入れること自体凄いことといえそ

うなのだ。

田所君はコーヒーの缶をテーブルに置くと頷く。

「あいつ大学で情報工学専攻だったらしくてさ、ハードからソフトからシステム・プログラム構築にかけては言うことなしだね」

「そんなに凄いの」

システム管理課は、システムエンジニアの集団。

そこに所属する田所君がそういうんだから、それだけの能力があるって事だよな。

信じられない様に呟くと、田所君は少し悔しそうに笑う。

「俺だつてさ、三年間やってきたプライドがあんだけさ。経験だけかねえ、今勝てるとしたら」

「ふうん」

昔仲良かった後輩が、ここまで褒められるのはやっぱり悪い気はしない。

つい頬を緩めると、田所君の顔に意地悪そうな表情が浮かぶ。

「ほら、嬉しそう。宮下も、あいつの事好きなんじゃないの？」

そう言われて、首をかしげる。

「というか、我が子が褒められてる気分。なんかね、高校の時、弟のように可愛がってたからその気持ちから抜け出せないのよね。成人男性に悪いけど」

「弟ねえ」

やっぱり腑に落ちない表情の田所君。

でもまあ仕方ない。本当にそんな気もちなんだもの。

少なくとも恋愛対象ではないかな。

「さて、私も総務に戻るわ。じゃあね」

缶コーヒーに口を付けている田所君に言い残すと、湯飲みを流しに片付けて私は食堂を出た。

第六話 みんなそう言っけれど

総務に戻ると、後輩が三人それぞれのデスクで仕事に勤しんでいる。

「あれ？ 鷹取部長は？」

総務の一番奥、部長の席に鷹取さんの姿が見えない。

自分のデスクが一番近い後輩、松本さんに席に座りながら話しかける。

松本さんはパソコンから目を離して、私を見た。

「部長なら経理に呼ばれていきましたよ？ 新規事業部のほうで何かあったとか。」

新規事業部？

松本さんにお礼を言いながら、自分のパソコンを立ち上げた。

衣料専門の店舗を運営するうちの会社は、衣料以外の業態に進出を始めた。

「今年の九月に発足した新規事業部「雑貨店 aquarelle」もその一つ。」

当時入社三年目の社員が中心となって立ち上げ、今年店舗をオープンさせた。

人数が限られている為にバイヤーが二人、アシスタントが二人、そして総務と経理を行う人間が一人しかいない。

そのたった一人、私の一期上の山下由梨さんがお休みの時は、総務ではうちのチーフが経理では一期下の椎名さんが代行する。

今日、チーフが休みだから鷹取部長が呼ばれたらしい。

九月に五人体制にするそうだけれど、それまではずっと山下さん一人。

それで仕事をこなしてるんだから、神業としか言いようがない。

「そっか、今日は山下さんお休みだもんね」

「ええ、取引先からのクレームとか。なので、今いいタイミングだと思っんですよ」

いきなり話と声のトーンが変わって、私の方に体が寄る。

「何が？」

聞きながら内心思い当たることであって、苦笑い。

「聞いてくれました？ 伊吹さんって誰かと付き合ってるんですか？」

やっぱりな

「あ、それ私も聞きたい」

「もちろん、私も」

残りの二人も小声だったというのに聞きつけて、私達のそばに来る。

あゝ、やっぱり来たか。

私は小声だった音量を少し上げて、彼女らを見た。

ああ、私今からかわいそうな事言うのよね。

お願い、私を恨まないで頂戴ね。

「付き合ってる子はいないけど、好きな人はいるからって」
「えー」

私の言葉に瞬時に反応した松本さんと、後ろでがっかりした表情を見せる二人。

「それって、先輩の事じゃないんですか？」

松本さんの、伺うような声。

その言葉に、溜息をついて答える。

「あのね、伊吹と会ってからまだ1週間しかたってないの。その間に、どう伊吹が私を好きになるのよ。だいたい、高校時代もそんな関係じゃないんだから」

田所君にも聞かれた問いに、少しうんざりしている自分。

「私も伊吹の好きな人、すごく知りたいのよね。好奇心が刺激されちゃってもう」

そこまで言った時、カウンター向こうの廊下に鷹取部長の姿が見えた。

「部長が来たわよ。さ、みんな仕事仕事」

さっとデスクに向き直って、立ち上げたパソコンが面を見る。

社内・社外あわせて数件のメールが来ている表示が、画面下に出ている。

「ああ、宮下さん。ちょっといいかい？」

部長がガラス扉をあけて、カウンター越しに私を呼んだ。

「はい？」

やっと仕事に戻れるかと思っていたところにこの声で、内心溜息をつきつつ。

カウンターをすり抜けて、ガラス扉の向こうにいる部長へと歩み寄る。

「なんですか？ 部長」

男性にしては少し低めの身長は、私と五cmくらいしか変わらない。細身の身体で、威厳……からは少し遠い位置にいるけれど、反対に優しい雰囲気ですべてに好かれている。

部長はラウンジに行こう、と私に言うので二階にあるそこへと足を向ける。

ラウンジには誰もいなく、窓際の席へと促された。

部長は自動販売機で珈琲を買って、私の前に置いた。

「九月に新規事業部の総務・経理が増員されることは知ってるね？」

「はい」

鷹取部長はポケットにしまっていた封筒を、私に差し出した。

「君に異動の辞令が出た。少し早いんだけど、伝えておこうと思ってる」

第七話 異動

渡されたのは少し大きめの茶封筒。

手にとつて中の紙を取り出すと、異動辞令と一緒に今後のスケジュールが印刷された紙が入っていた。

「私、総務のチーフになるんですか？」

スケジュールに書いてある総務と経理のメンバーにある私の名前の前に、チーフと役職が書いてある。

店舗と違って、事務の役職は2種類。

部長という管理者と、チーフという部のまとめ役。

店舗に言い換えるならば、部長⇨店舗管理部長 チーフ⇨エリアマネージャーということだろうか。

ようするに、私にとってありえない昇進なのだ。

部長は軽く頷くと、珈琲を一口飲み込む。

「総務・経理の山下さんとバイヤーの佐々田さんはこの社始まって以来の、初めての女性部長になるよ。そしてバイヤーの黒田くんも部長にね。だから君がチーフになっても、なんらおかしくはない」

「ええっ？」

さすがに驚いて、つい叫んでしまった。

部長は少し楽しそうに、私を見る。

「今日は事業部が休みだから明日発表になるんだけど、来年には事業部を社内ベンチャー企業として一つの会社にするつもりなんだ。そこに向けて、いろいろと整備していく。その一環だよ」

あっさりと告げてくる部長に、思考回路がついていかない。

「そう言うことだから、少しずつ仕事の引継ぎを始めて行って欲しい。君の後輩三人はいい子達なんだが、仕事よりも恋愛の方が気になってるようだからね」

あはは、ばれてるよ。松本さん達。

内心苦笑いをしながら、封筒に書類をしまいこむ。

珈琲を飲み干し、部長は立ちあがった。
腰を伸ばして少し唸る。

私も続いて立ち上がると、部長と一緒にラウンジを出る。

「大変だとは思いつけど、宮下さんならやっていけるよ。仕事なんて慣れだから」

「でも、チーフだなんて」

そこまで言って、口を噤む。

そうだ。

いつまでもぐちぐち言ってたって仕方ない。
やらなきゃいけないなら、前向きに。

少し息を吐いて、ぐっと頷く。

「やれるだけ頑張ってみます。悩んだら、部長を頼りますからね？

」

部長は目尻を下げて、優しく笑う。

「君なら、そう言ってくれると思っていたよ。前向きな君のその性格が、君自身を助けてくれるだろう。安心してんだ、私は」

その言葉に、心がふわっと軽くなる。

「頑張ります」

部長は強く頷くと、昼ごはんに行ってくると階段を上にあがっていった。

その後姿を見ながら、下へと階段を下りていく。

頼られることで、自分の居場所が出来上がっていく気がする。自分を必要とされることが、一番の幸せ。

手に持った封筒を胸に抱いて、もう一度ぎゅっと握り締めた。

第八話 異動発表当日

翌日、本社は一つの話題で持ちきりだった。

事業部を来年ベンチャー企業として独立させることに加え、入社四年目の三人の社員がそれぞれ部長という役職につく。

また総務の私がチーフに、経理の椎名さんも二年目という若さでチーフに抜擢。

事業部の部長は社長に、副部長は副社長に。

しかしこの二人は他の事業部の立ち上げにも関与している為、実質会社を動かしていくのは佐々田さんと黒田さんと山下さん、この三人。

他に後輩のバイヤーが二人いてアシスタントとして動くらしいけれど……

「宮下さん、事業部に行っちゃうんですね」

総務の自分のデスクでいろいろなところから来た驚きと祝福のメール（私信ばかり）を読んでいた私に、松本さんが溜息と共に話しかけてきた。

「ねえ、私も昨日聞いてびっくりよ。総務も二人増員されるけれど私の仕事はあなたに引き継いでもらうから、覚悟しててね？」
「にっこりと笑うと、少しうんざりしたような彼女の笑顔。」

「あなたの仕事を細分化して、五人で分けられるようにするから。頑張つて、引っ張っていつて頂戴。チーフに迷惑かけちゃだめよ」
本社総務のチーフ、川戸さんは六年目のベテラン。

「川戸さん、忙しそうですよ。社長の秘書も兼任しているから、

ほとんど総務にいないし」

松本さんの、二回目の溜息。

自分に降りかかってくる重みが、苦しいんだろうな。

実際、私もそうだったし。

「松本さんなら大丈夫よ、他の二人もいるんだし。あまり気負わないで、ね？」

そう笑うと、少し安心したように彼女は頷いた。

「すみませ〜ん」

ガラス扉を開ける音と、女性の声が同時にフロアに響く。

松本さんから視線をはずし、声のしたほうを見る。

「山下さん！」

カウンターへと歩み寄ってくるその人は、事業部の山下 由梨さんだった。

慌てて立ち上がって傍によると、山下さんはその大きな瞳を細めて綺麗に笑う。

「お仕事中にごめんなさいね。ほら、辞令が出たでしょう？ だから挨拶をと思って」

「こっこちらこそ、すみません！ 私からご挨拶に行くべきなのに……！」

私の言葉に、彼女は手を軽く振りながら「そんなこといいのよ〜」と笑った。

「今日の夜、空いてる？ もしよければ事業部の皆で飲もうかって言ってるんだけど、どう？」

椎名さんも来るから……と言葉を続ける山下さんに、即答する。

「はい、是非」

私の返答に安心したように頷くと、山下さんは手を振りながら総務から出て行った。

後姿が見えなくなってから、席に戻る。

「綺麗な方ですねえ、山下さんて」

松本さんの、溜息交じりの声。

私は頷きながら、彼女を見た。

「それで気さくで明るくて……。素敵な先輩だよね」

「なんていうか、お人形さんみたい。白い肌に茶色のふわふわの髪の毛、大きい瞳にすらっとしたスタイル。……なんか、りかちゃん人形を思い出しますね」

確かに、と笑いながらパソコンに向き直す。

さっき片付けていたメールの受信数がすでに増えていて、なんとなくうんざり。

私信メールにまぎれて、取引先とかからの連絡もあるから削除するのも気が抜けない。

なんだか、とんでもないことになっちゃったなあ

昨日は前向きにいろいろと気持ちを切り替えてみたけれど、やっぱり

重いな。

責任が。

軽く溜息をつくとき、再びメールとの格闘を始めた。

第九話 私の知らない君

「ではでは九月の異動の前ですが、集まれる人だけの懇親会ということでは？」

ゆっくりとした口調のその人は、副社長になる予定の焼津副部長。その隣に店舗設計の加賀さん。そこから事業部の面々が並ぶ。

「ただ、飲みたかっただけでしょう？ 焼津さんてば。部長がいないのに懇親会なんてね？」

突っ込みを入れて笑わせるのは、山下さん。

乾杯……と、グラスを合わせる。

「初めましてだね、よろしくね。宮下さん」

私の目の前に座る女性、佐々田さんがグラスをテーブルに置きながら微笑む。

「よろしくお願いします、佐々田さん」

佐々田さんは、この事業部の中心的存在。

と、聞いているのだけど……

なのに、どうだろう。この腰の低さは……

私に声をかけながら、料理に手の届かない人のお皿に盛り付けをしたりしてる。

「宮下さんは、間瀬くんたちと同期なんだよね？ 今度是非、この子達の弱みを教えて……」

「ないですから！ 俺に弱みなんて、一つもないですから！！」
間瀬くんが隣から、即座に突っ込み。
その隣で遠藤くんが、深く頷く。

「と、いつか？ 佐々田さんにこそ弱みはいつぱい……」
にやりと笑う間瀬くんは、佐々田さんが慌てたように言葉を遮る。

「黒田くん！ ほら仏頂面しないで、ご挨拶ご挨拶」
間瀬君とは反対側に座って、ビール片手に焼き鳥を食べている黒田さんに声をかける。

「仏頂面は余計だ。まあ、この通りうるさい事業部なんで、ある意味大変かも知れんけどよろしくな」
にこりともしないその表情は確かに仏頂面だけど、細身の眼鏡の奥に見える瞳は優しそう。

「山下は騒がしい奴だけど、まあうるさいけど、いや、ほらちょっとあれだけど……」

「少しも褒めてない！」
椎名さんと話していた山下さんが、くるっ……と黒田さんの方を向いて言葉を遮る。

「黒田くんはこの通り仏頂面だけど、細かいところがあって押しも強くて……あと、他に何かあったかしら」
意地悪く言う山下さんに、佐々田さんが笑う。

「この二人は元々仲がよくてね？ 凄く面倒見のいい人達だから安心してね」

そう笑う佐々田さんは、一番小柄なのに、みんなのお母さんとかお姉さんとかそんな存在のよう。

「面倒見がいいのは、佐々田さんでしょ？ 困ったことがあったら、部長より佐々田さんよ〜」
山下さんの明るい声。

本当にこの三人は、信頼しきってるんだなあ。

憧れてしまう、こんな関係。

ふ……と、脳裏にひっかかる。

仲がいい、この先輩たちは。

恋愛ごとでいざこざを起こしたことがあると聞いた。

話していたのは誰だったか、聞いたのは昨年の東京会議の日だったと思う。

目の前の人達を見ると、そんな感じは一つもない。

屈託なく笑うその表情に、噂って怖いな……と思った。

「すみません、遅れました」

飲み始めて一時間は過ぎた頃。個室の引き戸が軽くノックされて開いた。

そこに姿を現したのは、田所くんと

「あれ、伊吹……？」

後ろから伊吹が入ってきた。

二人は軽く会釈しながら靴を脱ぐと、出口に近い私の隣の席に座る。

「おお、きたか。システム管理！ 紹介するから少し立ってる」
腰を下ろした田所くんが、面倒そうに顔をしかめる。

「焼津さん、いいじゃないですかそんなの」
それでも立ち上がる田所くんが、面白い。

「最初が肝心だろ？ うちだけじゃなくてこれから立ち上げる事業部全体を専門に受け持ってくれる、システム管理課の田所くんと伊吹くん。異動するわけじゃないから辞令とかないけど、まあ……気分的に顔合わせ？」

少し酔ったのか、最後の言葉を適当に濁すと笑いながらグラスを一気に空ける。

紹介された二人は軽く会釈して、再び腰を下ろす。

「なんだ、お前もこっちに異動だったんだ。会った時に言ってくれりゃあよかったのに」

斜め前に座る間瀬くんが、少し身を乗り出して田所くんに言う。

「じゃあ、同期四人が集まるわけだ。先輩達の期よりも人数増えたな」

遠藤くんがにやりと笑いながら、佐々田さんと黒田さんを見た。

「頭数増えても立場はおんなじ」

そして黒田さんの一言で、一刀両断。

「立場は一緒でも、多数決は勝つ！」

間瀬くんが握りこぶしを胸の前で握りながら、佐々田さんに訴えて。
「間瀬くん酔ってるよ。お酒弱いんだから、この子は」

そういつて頭に伸ばした手を、横から黒田さんが掴む。

「こいつにやるなら、俺にしろ」

きよとん、と黒田さんを見上げる佐々田さん。

それを見て大笑いしてる、間瀬くん。

「宮下、メニュー貸して？」

そんな人たちを見ていたら、田所くんが私の横にあるメニューに手を伸ばした。

「あ、ごめん。気づかなくて」

その手にメニューを渡しながら、少し後ろにずれて壁にもたれた。

「田所くん、事業部の専属になるんだ。じゃあ、これからよろしくね」

「そう言ったって、別に課から離れるわけじゃねえし？ まあ、俺らの気持ち的にはあんまり変化ないんだけどな」

メニューを伊吹に渡すと、店員さんが持ってきたお絞りで手を拭きながら苦笑い。

「葉月先輩、俺には？」

伊吹はさっさと店員さん呼んで田所くんの分も一緒にオーダーすると、メニューを私に戻した。

少し拗ねたようなその顔に、思わず笑う。

「伊吹も、よろしくね。一緒に仕事したことないもの。どのくらい仕事ができるか、見ものだわ」

「また、そんな発言を」

「義孝、やっと来たわね。」

その声に、視線を動かす。

佐々田さんの所にいた山下さんが、伊吹の横に来た。

「山下先輩」

伊吹が笑う。

ズン……

ん？　なんか、胃が重い……

山下さんは伊吹のグラスにビールを注ぎながら、満足そうに笑う。

「義孝がこっち専門になってくれて嬉しいわね、これできき使える人が出来た」

「ひどいな、先輩。専門じゃなかったって、こき使ってるじゃないですか」

その言葉に、山下さんは軽く伊吹を小突いた。

「うるさいわね。でも、昨日は本当に助かったわ。ありがとう」

につこりと笑う、彼女は凄く綺麗。

私の視線を感じたのか、山下さんはその微笑を私に向ける。

「宮下さんと義孝は、知り合いなの？」

それは私が聞きたいな……、そんなことを思いながら口を開こうとしたら

「高校の時の先輩なんですよ、葉月先輩は」

さらりと、伊吹が笑う。

「葉月さんて、綺麗な名前ね。私もそう呼んでいい？」
山下さんが私の隣に来る。

「あっ、はい！」
慌てて頷くと、田所くんが山下さんを見る。

「山下さん、俺をすつ飛ばしてますよ」

「田所くんは今までも会う機会多かったからね。私は葉月さんと仲良くなりたい」

ひでえなあ、と呟く田所くんは運ばれてきたおつまみをさっさと口に放り込む。

「私は義孝と、大学のサークルが一緒だったのよ。おんなんじ先輩後輩ね。義孝をいじめて楽しみましょう」

語尾に音符がついてしまふんじゃないかと思うくらい、楽しそうな山下さんの声。

「山下先輩、それはないんじゃないですか？」

そう呟く伊吹の肩を、軽く叩く。

「義孝は、いじりやすいんだもの。ね？」

……仲、いいんだな。この二人。

「じゃあ、いじり倒すか」

そこに、黒田さんの声が入ってきた。

「じゃあ、みんなでいじり倒そう」

田所くんが、グラスを空けながら意地悪そうに笑う。

「それはないっすよ、先輩」

「でも、この事業部の最年少だからな。な、椎名さん」

焼津さんが隣に座る椎名さんを見る。
椎名さんは、面白そうに笑ってる。

「あ、で、義孝。昨日のデータのバックアップ。とっといってくれた？ 部長さんに頼んでおいたんだけど」

「とっておきましたよ。うちの部長に頼んで、すぐに帰ったでしょ？ 俺、昼飯せかされてまでやったのに」
拗ねたような表情の伊吹を、山下さんはお姉さんのような微笑で受止める。

「義孝ならできると思ったからよ」
「ただ単に、休みだから早く帰りたかっただけでしょ」

「ばれた？と笑う彼女はとても可愛くて、そして彼女を見る伊吹は…
…私の知らない伊吹だった。」

第十話 伊吹の想い人

「山下さんの事が、好きなの？」
飲み会がお開きになって同じ方向の電車に乗る私と伊吹は、ホームで電車を待つていた。

「え？」

ワントテンポ遅れる、伊吹の声。

すでに終電ということもあり混んでいる向かいのホームには、きつと山下さんも含めて他の事業部の人たちもいるだろう。
私達が待つ方はこの時間は混まない、上りホーム。
それでも小さな声で、伊吹に聞いた。

「葉月、先輩……？」

私を見下ろす伊吹の表情は、まるきり固まっている。

ああ、やっぱりそうなんだな。

その顔を見ただけで分かっってしまう、自分て凄いな。
なんて、自己満足を感じつつ意地悪く笑う。

「ふふ、そっか」

伊吹はやつと思考が動き出したようで、口をへ字に曲げて下を向く。

「そんなに俺、見え見えでした？」

「そんなことないわよ。やっぱり、ほら。私、昔の伊吹を知ってるから。だからじゃない？」

私たちと話す時とは違う、少し嬉しそうな声のトーンに気がついた

だけ。

私の言葉に、ほっ……軽く息を吐く。
そして、私を見た。

伊吹が口を開く前に、素早く私が言う。

「言わないわよ、誰にも。だって……」

言おうか言うまいか、躊躇しつつ。

「山下さん、付き合っている人……いるものね」

いざこざを起こしてまで手に入れた、彼氏。

口を開きかけた伊吹が、再び噤む。

少し苦しそうなその表情に、口端を緩めて目を細める。

「伊吹？」

私の声に、噤んだ口を開いた。

「無駄なことしてるって、分かってはいるんですけど」

向こうのホームに電車が滑り込んでくる。

姿は見えないけれど、きつとこの電車に乗って山下さんは帰途に着くのだらう。

伊吹が電車に目をやるのは、きつと同じ事を考えているから。

「……無駄じゃ、ないんじゃない？」

電車がホームを出て行った後。

風が収まるのを待って、私は口を開いた。

「好きな人に相手がいるからって、すぐにその気持ちを切ることなんて出来ないもの」

「葉月先輩」

私を呼ぶ伊吹の声が、少し震えてる。

「自分で気持ちの整理がつくまで、心の中で想うのならそれは自由よ。ね、だからそんな表情しないで」

手を伸ばして、ぱちりと頬を軽く叩く。

「つい、かわいって言いたくなっちゃうわ。嫌でしょ？」

少し驚いた顔をしていた伊吹は、微かに笑う。

「もう、俺にかわいいは似合いませんよ」

「そう？ 私には、いつまでもかわいい後輩だわ」

終電がホームに滑り込んでくる。
風にあおられた髪を片手で押さえると、伊吹が風上側に立った。

「ありがとうございます、葉月先輩」

照れたような、泣き出しそうな。

それでも微笑んだまま、彼は呟いた。

終電でアパートに辿りついた時には、すでに深夜一時を回っていた。伊吹は私が降りる駅よりも遠くに住んでいて、電車を降りる私を心配そうに見ていた。

本当は送ると言った伊吹の申し出を断ったわけなんだけど。

だって、伊吹が帰れなくなっちゃうじゃない。

シャワーを浴びて、クーラーで冷えた部屋に入る。
上気した頬に、冷気が気持ちいい。

「ふは……」

濡れた髪をタオルで拭く。

既に熱帯夜が続く最近、長い髪の毛が鬱陶しくてたまらない。

「切ろうかな……たまには」

毛先を指でつまみながら、鏡を見る。

セミロングの私の髪は、しっかりとした直毛。

一度パーマをかけたら、五時間もかかって二度とやるまいって思った。

鏡を横に追いやって、机に突っ伏す。

多分、伊吹は山下さんの事を、私に聞いて欲しかったんだと思う。

夜道が危ないからって、それもあるんだろうけれど。

誰にも言えない想いを抱えてきたんだから、言える人が出来れば話したいだろう。

机がクーラーで冷えていて、冷たくて気持ちいい。

指先でこんこんと叩いて、溜息をついた。

嬉しそうに話しかける、伊吹の横顔。

いつもより、楽しそうな声。

声をかけるのをためらうような、二人の空間。

田所さんと話す振りして、つい無意識に様子を伺っていた自分に気がついた時、凄く恥ずかしかった。

周りに伊吹の好きな人は私じゃないかって言われて、冷静に否定していたけれど。

実際は、期待していたのだ。

もしかして、そうなんじゃないか

高校から、ずっと好きでいてくれたんじゃないか

くすり、と笑う。

会うまで、すっかり忘れていたのにね。

自意識過剰だわ、私。

誰に指摘されたわけでもないのに、凄く恥ずかしくて自己嫌悪に陥る。

多分、私……恋愛感情じゃなくて、独占欲を刺激されたんだと思う。

「私、嫌な性格」

溜息と共に呟く。

“先輩”と伊吹に呼ばれるのは、私だけなのにつて。

「まだまだ子供だわ、私のほうが……」

もう一度呟いて、目を閉じた。

第十一話 同期

九月に入って、私は事業部へと異動した。職場も、本社から程近いビルに移って。

部屋のドアに向って右が総務、左が経理。そして窓を背に山下さんのデスクがある。

五人体制といっても、それぞれ二人ずつに山下さんという上司を一人持っただけだから、仕事の量が半端ない。

よく、これだけの事を山下さん一人でやってきたと思う。

「お先、失礼します」

仕事を終えて山下さんに声をかけると、彼女はぴらぴらと手を振りながら「お疲れ様」と微笑む。

軽く頭を下げて、部屋から出た。

「あれ、宮下。もう、帰りか？」

ドアを出たところで田所くんに会う。

「うん。田所くんは？ 山下さんに用？」

手に持っている厚い書類の束に視線を落とすと、彼は首を振った。

「いや、黒田さんの頼まれごと。あ、夜ひま？ メシ食っていかねえ？」

「うん？ いいけど……」

田所くんはちよつと待ってて、と私に言うと三階のバイヤー室へ階段を駆け上がった。いった。

なんか、最近田所くんからのお誘いが多い。

最初は同期だから……って思ってたけれど、こつも頻度が高いと少し考えてしまう。

いや、自意識過剰かとも思うんだけど。

頭の中で逡巡しながら、帰ってくる田所くんを待った。

最近来ることの多い、居酒屋さん。

まったくの個室じゃないけれど、向かい合った背もたれの高い二人掛けの椅子に横は窓。

通路側は高い衝立があつて、覗き込もうとしない限り多分私たちを見ることはないと思う。

初めてここに来た時、ちょっと引いてしまった自分がいて。

それを悟られたくなくて普通の表情をしていたら、ここがいつもの場所になつてしまつた感じ。

「で、どうだよ。新しい職場は」

カクテルの入つた細目のグラスを持ち上げながら、田所くんが話し出す。

私は烏龍茶のグラスをテーブルの上で両手で包み込みながら、小さく首をかしげた。

「そうだね。精一杯でよくわからないつてところが本音かな」
どう、とか考える暇がない。

とにかく次から次へと仕事が入つてきて、終わらない。

「そっか。俺は、反対に暇になつたなあ」

溜息をつく彼へ、視線を向ける。

田所くんは、軽く頷くとグラスを口につける。

「俺の担当、次に出来るクリエイターのセレクトショップの方が専門だから。どっちかかって言うと、伊吹がお前たちの方専門なんだ」
「クリエイターのセレクトショップ？」

初めて聞いた言葉に、喰い付く。
いきなり興味を持った私に少し戸惑いながら、田所くんは口に手を当てた。

「まだ次の事業部の内容発表になっていないから、内緒な？」
「そうなんだ、うん」

そうだよ。まだ雑貨部隊が走り出したばかりだから、すぐに事業部発足にはならないだろうし。

「いまんとこ、部長の……ってまあお前んとこの部長の北条さんが、事業部の基礎を固めてるところかな」
「ふうん」

仕事はめまぐるしい。

自分の仕事だけに目を向けているならば、ほとんど毎日同じ仕事を繰り返ししていくだけなだけで。

他に目をやると、自分って大きな流れの中にいるんだなあって。そう思うと面白い。

じゃあ、新しい事業部へは誰が行くんだろう。
来年雑貨部隊がベンチャー化するなら、発足はその後になるのかしら。

クリエイターのセレクトショップっていうことは、そんなに大型店

舗にもチエーン展開も出来ないだろうし。

小さな事業部を、沢山作っていくつもりなのかしらん……

そんなことを考えながらグラスを空ける。

いつの間にか田所くんが頼んでくれたのが、私の目の前に梅酒のソーダ割が置かれた。

「それ、宮下好きだろう？」

にこりと微笑む、田所くんの顔。

「うん、ありがとう」

そのグラスに手を伸ばしながら、罪悪感が心に浮かぶ。

この人は、本当に私の事が好きなんじゃないだろうか。

伊吹の時みたいに、私の意識過剰じゃなくて。

もし、そうなら。

こうやって食事に一緒に来るの、あんまりよくないよね。

言わなきゃだめかな。

話を続けている田所くんを見ながら、話は耳から流れていく。

短い髪にがっちりした体躯。

かっこいいとはいえないかもしれないけど、頼りになるお兄さんのような雰囲気。

確かラグビーを大学の頃、少しやっていたと聞いた。

怪我をして、途中でやめたけどって笑ってた。

「宮下、聞いている？」

彼の声に、夢から覚めたように目をぱちぱちと瞬きさせる。

田所くんは苦笑い気味に、私を見ていた。

「あ、ごめん。ちょっと考え事しちゃった。で、何？」
慌てて持っていたグラスをテーブルに置くと、田所くんは溜息をつきながら笑った。

「宮下って……」

田所くんが、何か言いかけた時だった。

「あれ、葉月先輩？」

衝立の間隙から、伊吹の顔がこちらを覗き込んでいた。

「伊吹っ」

びっくりして小さく叫ぶと、伊吹が衝立からこっちに身体を滑り込ませた。

「田所さん、お疲れ様です」

伊吹は私を見ると、そのまま田所くんに軽く頭を下げる。

「おう、お疲れ〜。お前も飲み？」

田所くんは持っていたグラスを軽く上げると、伊吹は頷いて後ろを見た。

「義孝。誰かいるの？」

衝立の向こうから、明るい女性の声。

心臓が、ドクンツと跳ねる。

顔を見せたその人は、案の定、想像した通りの人だった。

「山下さん」

名前を呼ぶと、嬉しそうになっこりと微笑む。

「葉月ちゃん、お疲れ様〜。なあに、デート？」

最後のほうに楽しそうな雰囲気を漂わせる。

「えっ？ いや、ちがっ……」

慌てて否定すると、田所くんが言葉を継いだ。

「違いますよ。俺ら同期で飲んでるだけです。山下さんたちは？
仕事の話ですか？」

山下さんに彼氏がいるのは周知の事実で。
当たり障りのない話題を出してみただろう。

山下さんは、そうそうと頷く。

「今度、雑貨店全体のシステムを少し変えて欲しいと思って。大変
になるから、先にご褒美をあげておこうかと……」

「俺は、犬ですかい」

山下さんの言葉を、伊吹が苦笑いしながら遮る。

「お手」

面白そうに出す山下さんの右手を、ぱちりと軽く叩く。

「じゃ、お邪魔してもなんだから行きましようか」

山下さんがそう言うと、伊吹も頷いて衝立から向こう側へと動き出
す。

「別に、お邪魔なんて……」

私が口を開くと、伊吹が私の方に視線を向けた。

「……？」

なんだか、寂しそうな切なそう。

そのまま言葉をつなげられなくて、山下さんたちは衝立の向こうに
姿を消した。

……そうか。邪魔、されたくないよね。

好きな人と、一緒にいられるんだから。
山下さんと二人だけで一緒にいられる大義名分なんて、そうそうない。

こっちの方が、邪魔だわ。

溜息をついて、グラスを握り締める。

「お前さ、伊吹の事好きなんだろ？」

「え？」

いきなり言われて、がばつと頭を上げる。

田所くんは、私をじつと見ていた。

「伊吹が来た途端、嬉しそうな顔して。俺とデートって言われて慌てて否定して。山下さんと二人でいるのを見て、悲しそうな顔をして」

「……そういうんじゃない、と思うよ」

私の言葉に、首をひねる。

「どういうこと？」

言いながら、グラスをあおった。

嫌だな、これいうの。

でも、言わなきゃいつまでも言われるわけで。

それは勘弁して欲しい。

「子供がおもちゃを取られて悲しがるのと一緒。先輩って立場、山下さんにとられちゃったな〜って」

「それだけ？」

「それだけ」

空になったグラスをテーブルに置いて、田所くんは腑に落ちないように唸る。

「伊吹、山下さんの事好きだよな。きつと」

「え？」

少し驚いて、田所くんを見る。

彼は、苦笑い。

「気づいてなかったのか？ って、俺も最近気づいたんだけどさ」

これは……頷くべき？ 否定するべき？

少し考えて、視線を上げる。

「気づかなかったなあ、私。でも、それどちらにしる秘密事だね」とりあえず、釘をさしておこう。

「だろうな、俺も他の奴に言つつもりはねえよ。だって、山下さん。彼氏いるもんな」

そう溜息とともに田所くんは言うと、伝票を持って立ち上がった。

「もうそろそろ帰るか。山下さんにはそんな気持ちなくても、伊吹にとっては俺達がいるの、気になるだろうから」

「あ、うん」

田所くんが続いて立ち上がりながら、鞆を掴む。

衝立の向こうに出ると、少し離れたところに山下さんの姿が見えた。

向こうも気がついたようで、こちらに向って軽く手を振る。

その向かいから、ひょっこりと伊吹が顔を出して頭を下げた。

二人とも、楽しそうな雰囲気。

私は軽く頭を下げて二人に答えると、田所くんを追うように会計を済ませると外に出た。

「なあ、宮下。お前は、好きな奴いないの？」

駅の改札口をくぐりながら、田所くんが呟いた。

「え？」

そこまですつと無言だったから、言葉は聞こえたけれどつい聞き返す。

田所くんは、少し上の位置から私を見下ろす。

「いや、好きな奴でもいれば伊吹への……その独占欲？　が、薄らぐんじゃないかって」

もごもごと口の中で呟く彼は、すこしばつが悪そう。

心配してくれてるのかな。

田所くんに対して、少し反省する。

私の事を好きなんじゃなくて、伊吹と私を心配してくれてるんだ。なのに、私ったら。

「そうだね、好きな人か……。今は、あいにくいけど。どこかにいないかね、素敵な人」

「失礼な。隣にも一人いるだろう」

右の人差し指で自分を指差す田所くんに、つい噴出す。

「あはは、ありがとね。でも、伊吹に対しての気持ちだって、そんな強いものじゃないし。恋愛感情じゃないだけ、たぶんさっさと

くなるから。大丈夫、気にしないで」
そういつて微笑むと、田所くんは頷いて私の頭を軽く叩く。

「ま、気晴らしがしたけりや俺を使えや。なかなか同期が固まることないしな。ほら、間瀬でも遠藤でもいいし。じゃ、お疲れ様」

そういつて、下りのホームへと歩いていった。

その後姿を歩きながら横目で見える。

確かに、今まで同じ本社内にいたけれど事業部に異動するまでそんなに話さなかったし、店舗に出た同期なんて、年に数回しか会わない。

貴重な存在といえはそうなのかもね。

「お兄さんみたいだわ」

同じ年の彼に失礼だろうなと思いつつくすりと笑うと、私も上りホームへと階段を上がっていった。

第十二話 かわいい先輩

異動した九月もすぐに過ぎ去り、既に十月の終盤を迎えようとしている。

事業部の総務・経理室からは、表の道路が見えて。

木枯らしが吹き始めた風景は、七月に本社から見ていた梅雨の終わらない風景とはまったく変わっていた。

湿気で曇ることのない眼鏡は、綺麗に風景を目に写してくれる。

バイヤーの佐々田さんと黒田さんは、クリスマススの準備で部署を留守にしていることが多く、朝しか姿を見ない。

間瀬さんと遠藤くんは秋物の取り扱いや、冬物の売り場計画に忙しいらしく東京の支店に行っただきり。

「おはよう、葉月さん。山下さん出勤してる？」

総務に入ってきた佐々田さんが、視界に入った私ににこやかに笑いかけた。

山下さんのデスクには既に鞆がかけられているけれど、本人の姿がない。

私は首をかしげながら、椅子から立ち上がった。

「出勤されてるようですが、どちらにいるかはちょっと……」

私も出勤してきたばかりで、山下さんの姿を見ていない。

「携帯もつながないんだよねえ。あの忙しいから、朝のうちに連絡つけておかないと時間空けられないだろうし……」

軽く握った拳を口に当てて首を傾げていたけれど、ポケットからメ

モ帳を取り出してさらさらと何か書き付けた。

「これ、来たら渡しておいてくれるかな。ついでに、私に電話するようにつて」

私に二つに折りたたまれた紙片を渡すと、お願いね……と部屋を出て行った。

後姿を見送って、椅子に腰をかける。

パソコンの電源を入れると、小さな機械音が響いた。

預かった紙片を指先でつまみながら、凄いなあ……とつい言葉が零れる。

佐々田さんの彼氏を、山下さんが奪ったと聞いた。

なのに、二人はとても仲がいい。

そんなことがあった後に、一緒の職場になって強制的に一緒にいたから？

だから、仲直りできたのかな？

「よくわかんないや」

「何が？」

誰もいないと思った部屋で、いきなり問いかけられる声にびくつ…と身体をすくませる。

「えっ……？」

声のしたほうに視線を向けると、黒田さんが立っていた。
背……たかつ

ドアをくぐるように頭を少し傾けて、部屋に入ってくる。

「山下は？」

「あっあの……出勤はしてるみたいですが、姿が見えなくて……」
佐々田さんに言ったそのままを、また同じように繰り返す。
黒田さんは、またかよと面倒くさそうに呟くと、さっさと外に出て
行ってしまった。

慌しいなあ……

再び椅子に腰を下ろす。

黒田さんで、佐々田さんが好きなんだよねえ。

息を吐き出して、パソコン画面から視線をはずす。

飲み会の時から思っていたけど、佐々田さんを見る黒田さんの視線
は好きな人を見るそれだと思う。

山下さんに対しても優しいけど、少し違う。

佐々田さんには彼氏がいるのにあまり隠そうとしていないその態度
が、かえってさっぱりしてて悪いように見えない。

それに佐々田さんが少しも気がついていないのは、事業部では周知
の事実なんだけど。

「葉月ちゃん、おはよう〜」

その時、勢いよくドアが開いたかと思うと、山下さんが部屋に入っ
てきた。

手にジャスミン茶のペットボトルを持って。

私は、おはようございますと挨拶をしながら、紙片をとって立ち上がった。

「さつき、佐々田さんがこれを山下さんにつて。あと、黒田さんも探してられたみたいですけど」

山下さんは私から紙片を受け取ると、そのまま自分の椅子に座る。

「黒田くんも来たの？あゝ、また怒られるなあ。いつもいなくて、怒られたばかりなのに」

そういつて笑いながら二つに折りたたまれた紙片を広げる。

途端、山下さんの口から嬉しそうな声が漏れた。

電話に手を伸ばして、受話器を取り上げる。

内線のように、ボタンを一つ押しただけで背もたれに寄りかかる。

「あ、佐々田さん？ごめんねさつきいなくて。コンビニにお茶を買いに行つてたの」

三階にいる佐々田さんへの電話のようだ。

私は立ち上がったパソコンの方を向いて、メールの処理を始める。意識だけは、山下さんのほうに向っているけれど。

「今日なら夜の七時でいいんじゃない？和弘くんが空港に着くの、夕方つて言つてたから」

……？ 和弘くんて？

「あ、梶さんもこれそうなんだ。じゃあ、黒田くんとの攻防が見ものだね。菊池くんは間に合うかなあ。今日の昼から休み取れたから

来るとは言ってたけど、長野から車でこっちでしょ？」

なんだか知らない人の名前が、たくさん。

「じゃ、黒田くんにも言っておいて。なんか、さっき来たって聞いたから。うるさいからねー」

その後仕事の話を少しして、電話を切った。

「さて、仕事頑張りますか」

少しはずんだ声の、山下さん。
嬉しそうな表情。

横目で見ていたら、山下さんと目が合った。

「あ、ごめんね。うるさかったかな」

「えっ、いえそんなことなくて……。その……。なんだか、嬉しそっただなって」

つい、口から本音が出る。

ああ、こんな事いっちゃだめだよねえっ！

失言してしまったと慌てる私に、きょとんとしていた山下さんはふんわりと微笑む。

「うふふ、ごめんね。付き合ってる人がね、九州から今日帰ってくるの。だから、ちょっと嬉しいかな」

内緒ね、と人差し指を口に持っていく彼女は、私が言うのもなんだけど本当に可愛かった。

第十三話 偶然ではなく……

「葉月先輩！」

翌日、休日だった私は最寄り駅に入っている本屋で立ち読みをしていた。

肩を叩かれて振り向くと、私服の伊吹。

「あら？ 今日会社お休みだったんだ」

パーカーにGパン。

普通のおにーちゃんだね。

伊吹は私の横に立って、読んでいた本を覗き込む。

「また難しそうな本読んでますね。グローバリズムの……うんたらかんたら」

最後の方は口の中でむにやむにやいって笑う。

「昼飯食べに行きませんか？ 俺この駅ビルに入ってるうどん屋が好きで、よく来るんですよ」

「そうなんだ。なんでこんなところにいるのかと思っちゃった」

そう言っつて伊吹を見ると、視線が宙をさまよう。

「……？」

なんとなく変な雰囲気だったけれど、聞かずに視線をはずす。

そして私は手にしていた本を棚に戻すと、伊吹と連れ立って店を出る。

私たちにとって休日とはいえ、普通の人には平日の昼間。

人通りも少なく、目当てのうどん屋も混んでいなかった。

お互いに関東出身だからこそなのか、濃い醤油味ではなく讃岐うどんを頼む。

ほら、なんか外で食べるなら慣れた味より違うものを食べたいじゃない？

水の入っているグラスを持ったまま、伊吹は話し出す。
内容はいたってなんでもない、当たり障りないものばかり。

仕事の事や、高校の昔話。

自分の住んでいる駅にはおいしいご飯屋さんがないとか。
確かにいつもよく話すほうだけど、なんかおかしいな。

運ばれてきたうどんを早々に平らげ、まだ話したりなさそうな伊吹を促して外に出る。

「伊吹、散歩でもする？ ちょっと寒いけど、今日は風もないし」
「はい」

連れ立って駅ビルから出ると、ひんやりした風が頬を撫でる。

「少し寒いわね。大丈夫？」

そう聞く私に、ぎこちない笑顔。

「じゃ、途中でなんかあったかいものでも買おうか」

そう言って歩き出す私の横を、さっきとは違って変わって無口になっ
てしまった伊吹が歩く。

駅から少し歩いたところにある、大きな公園。

入り口の近くに建つコンビニで、お互い温かい飲み物を買ってその
まま公園のベンチに腰掛ける。

赤くなった頬が、少し子供っぽい。

横目で様子を伺いながら、溜息をついた。

「私に、何か言いたいことあるの？」

「え？」
珈琲の缶に口をつけていた伊吹は、私の声にこちらを向いた。
見下ろされる感覚に、まだ少しなれないけれど。

伊吹は口を開いては噤んで。

それでも何か言おうと逡巡している姿に、少し突っ込んでみる。

「山下さんの付き合ってる人、こっちに戻ってきてるんだってね」

伊吹は視線を上げて私を見ると、また目を逸らして下を向く。

「お見通しですか？」

やっと出たのはその言葉だったらしい。

「お見通しみたいね」

くすりと私が笑うと、力が抜けたように肩を落としながら苦笑い。

「ちょっと、一人でいるの嫌だったもんで」

その言葉に、少しひっかかる。

「え？　じゃ、私に会いに駅にいたの？」

「まあ、会えるかな……位の軽い気持ちでしたけど。その、この話出来るの葉月先輩しかいなくて」

少し呆れて、顔を覗き込む。

「これから先だって、そういうことはあるんだから。その度に、誰かに頼ったりなんて出来ないのよ？」

「や、分かってはいるんですけど」

私は駆け込み寺かって。

強い口調になってしまったようで、伊吹は俯いて黙ってしまった。

言い過ぎたかな。

聞こえないように小さく溜息をつく、ぼんぼんと軽く頭を叩く。

「私は先輩だからいいのよ。何？ 何でも聞いてあげるわよ」
確かに今頼れるのは、私しかないんだろう。
追い込んだじゃだめだよ。

伊吹は掠れた様な、力のない声を出した。

「今回だけです。今日だけ、本当にすみません」
今日だけ？

その言葉に首を傾げると、伊吹は私の方に視線を向けた。

「山下さん、結婚が決まったんです」

？ え？

思考がとまる。

「結婚？」

口に出したことで、少し楽になったのだろう。

伊吹は、それでもゆっくりと話し出した。

「前に居酒屋で会ったことありましたよね？俺と山下先輩と一緒にいる時」

視線を宙にさ迷わせながら頷く。

「あの時仕事の話と一緒に聞いたんです。次に彼氏がこっちに帰ってきたら、両家の顔合わせするんだって」

「……」

何も言えずに、ただ伊吹の顔を見る。

「山下先輩、来年部長になるじゃないですか。今以上に忙しくなったらなかなかタイミングはかれなくなるから、結婚の話を進めるんだそうです」

そう言われて、ふと昨日の山下さんの電話を思い出す。

今日は、いろいろ仲間が集まるようだった。

中には、長野からわざわざ車で来る人もいた。

そして、嬉しそうなあの笑顔。

それは、こう言う事だったのか。

「だから、今日だけです。高校みたいに弱気な俺は」

そう言って笑う伊吹の表情に、胸が苦しくなる。

失恋は失恋でも、相手が結婚してしまうなんて。

ぎゅっ……と拳を握り締める。

「わかった伊吹。じゃ、飲みに行こう！ いっぱい飲んで、せめてその間だけでも忘れちゃいなさい」

「葉月先輩？」

突然宣言して立ち上がる私に、伊吹は呆気に取られたような表情を向ける。

「いいじゃない、二人で飲んだことなかったし。誰にも気を使うことないんだから、山下さんの話、沢山しなさいよ」

「先輩……」

伊吹の手を持って、身体を引き起こす。

「話せば楽になるわよ、少しは。まだ昼間だから、飲めるところが開くまで、買い物でもしましょうか」

「でも、先輩に悪いし……」

大きい身体を小さくして、私を見る。

その背中を、軽く叩いた。

「今更でしょ？ 私に会いに来ておいて。じゃ、なんか買ってもらうかしら。それで、おあいこ」

そう笑う私に、やっと伊吹の顔が緩む。

「なんでも買わせて頂きます」

「じゃ、行きましょ？」

歩き出す伊吹を見上げながら、少しでも悲しみを和らげてあげたい自分と、その反対の自分があることに、少なからず気がついていった。

第十四話 私の立ち位置

「聞いてますか？ 先輩」

もし他の誰かが私の立場でも、目の前の男を殴り倒したくなるだろうことうけあい。

「聞いてるわよ……」

居酒屋さんが開く十七時までぶらぶらと買い物していた私達は、開店直後の店に入った。

それからもう三軒目。

時間は既に深夜0時をまわろうとしているところ。

最初は私が促すように伊吹に話させていたけれど、二軒目に入ってから伊吹の目が座ってしまった。

いや、凄い飲むとは思っていたんだけど。

どのくらい飲めるかなんて知らなくて。

さすがに大人だし、自分の許容量くらいは知っているだろうと思ったのが間違이었다。

二軒目を出る時にさすがにやばいなと思った私は帰るように促したんだけど、酔いのまわった伊吹は強引に私の手を引いて三軒目に突入。

で、今に至ると。

酔っ払った伊吹に、怖いもの無しだわ。

今現在山下さんとの出会い編を聞いているけれど、これ、多分四回目。

最初は親身になってもみたけれど、さすがにあきてきたなあ。

「最初はね、葉月先輩に似てるなあって思ったんです」

はいはい、それも四回目だわ。

伊吹はグラスを両手で抱え込みながら、目を瞑ってる。傾いてきているところを見ると、もうそろそろまずいかなあ。

店員さんをお呼んでお会計を席で済ませます。

その人も相手が酔っつているのを見て気を使ってくれたらしく、おつりと一緒にタクシーの名刺をくれた。

そうね。タクシーに突っ込んで、アパートまで運んでもらおうかしら。

そんな事を考えている私を尻目に、伊吹はまだ話し続けている。

「ちよつと伊吹、少し中断。あんたのアパート教えて？」

話の腰を折るようで悪いとは思ったけれど、潰れる前に聞いておかないと部屋まで送れなくなっちゃう。

「そんなことはどーでもいいんです！」

いや、どうでもよくないって。

「ちよつと伊吹……」

口を開こうとした私に片手をかざして言葉を制すると、再び伊吹の独壇場。

「高校の時に葉月先輩と一緒にいるの楽しくて、それを思い出して話しかけに行っただの覚えてます」

「ああ、そう」

「一緒にプログラム作ったりして。でも就活始まってそんなに会えなくなってる」

「そーう」

こんなことの繰り返し。

で、会いたくなったら山下さんの友達と仲良くなって、山下さんに会うチャンス増やしたんでしょ？

すでに四回目ともなると、先が分かってくるまで頭の中で続きを思い浮かべる。

それよりも、早くあなたのアパートの場所を知りたいっての。

「だから追っかけてきたんです。この会社に」

「え？」

今までの流れと違う伊吹の言葉に、タクシーの名刺を見ていた私の動きが止まる。

「だーからー、俺、山下先輩を追ってこの会社に入ったんですよ」

山下さんを、追って？

偶然一緒の会社になったんじゃないか？

「なのに、結婚だなんて……、俺っていったい何の為に……」
そこまで言って、伊吹は机に突っ伏してしまった。

「一緒の……会社……」

はたと気づく。

そっか……

そっかだね。私の事を追ってきてくれたんじゃないかって最初に期待したけれど、例えばそれは私じゃなくてもあることで。

七年も離れていた私より、四年しか離れていない山下さんの方がありえること。

そんな人に、嫉妬したってどうにもならないじゃない、私。先輩って呼ばれるのは私なのに……どころじゃない。

伊吹は、山下先輩の為に自分の進路を決めたんだ。

軽い寝息を立て始めた伊吹を見る。

「大人になつたつて言うけれど、充分まだ子供よね。ホント」
溜息をつくとき、タクシーを呼ぶべく席を立った。

「お願いだから、ちゃんと歩いてよおっ」

伊吹の腕を肩に乗せて、懸命に廊下を歩く私の頭の上から伊吹の言葉とも歌ともよくわからない音が聞こえる。

二階角部屋つて言う部屋に満足してたけど、こういう時つて一階のほうがいいわね。

つて言つても、こんなこと度々あるわけじゃないんだけど。

……あつてたまるか。

「よいっ……しよ」

片手で鍵を開けてドアの中に、伊吹を押し込む。
玄関に、でかい身体が倒れこんだ。

「ふう……」

額の汗を右手で拭ってドアを閉める。

見下ろす先は、酔いつぶれた伊吹。

机に突っ伏したまま動かなくなってしまった伊吹を、店員さんと呼んだタクシーの運転手さんの二人掛りで車に突っ込んで。

しかも伊吹、住所を言う前に潰れちゃったから、仕方なく私のアパートに運んでもらったのだ。

かといって、そこは一応女性であって。

一人暮らしの部屋に人を入れるのが嫌だったから、近くで降ろしてもらってそこから伊吹を一人で引きずってきた。

私、警戒しすぎなのかしら。

でもいい人ばかりとは限らないこの世の中。

自分で納得できるように身を守るくらいは、しなくちゃね。

あゝあ、絶対明日筋肉痛だわ。

玄関から両腕を引っ張ってリビングに連れて行く。

「ほら伊吹、せめてソファに登りなさいな」

身体痛くなるわよ、こんなところで寝てたら。

頭とか肩とか叩いてみたけれど、身じろぎするだけで目は開けず。

諦めて、上から掛け布団をかける。

「まったく、いい気なものね」

あれだけいじいじとしゃべり続けておきながら、眠る姿は子供のよう。

腕を組んで溜息をつく。

）
玄関に置きっぱなしにしておいた鞆から、明るい曲が流れてくる。

「あ、田所くんかな」

慌てて鞆から携帯を出すと、田所くんにさっき送ったメールの返信が来ていた。

「伊吹？ あいつなら、明日九時出勤だからそれ以降ならいるんじゃない？」

九時……ね。

確認して、携帯を閉じる。

タクシーの中から、田所くんに送ったメール。

「伊吹から返してもらいたいものがあるんだけど、メルアド知らないの。明日、あの子出勤？」

システム管理課は通常部署と違って勤務形態が変則的だから、明日伊吹を一体何時に起こせばいいかわからなくて遠まわしに田所くんに聞いてみたんだけど。

「上手いと思わない？ 私。」

「一緒にいるとはさすがに言えないしね。」

とくに、田所くんは伊吹が誰の事を好きか知っているんだから。

「……せんばい」

伊吹の口から零れる言葉に、びくっ……と肩をすくめる。
伊吹は幸せそうに口をむにやむにやと動かすと、また眠りに落ちていく。

細く息を吐き出して、傍らにしゃがみこむ。

頬に落ちる髪を、指先でかき上げる。

赤く染まった頬に、閉じた瞳。

こうしてみると、確かに高校の面影がある。

「ね、伊吹」

声に出して、口を嚙む。

いま、誰を呼んだの？

私？ 山下さん？

ね、伊吹。……私、

「少し、苦しいかも。このポジション」

溜息をついて、目を閉じた。

第十五話 わたし

なんか……朝だっというのに、疲れたな。

自分のデスクで書類を広げながら、私は溜息をついた。

時計は十時を指している。

今日は十時半から事業部の会議があるから、それまでに資料をまとめておかなきゃいけないんだけど。

寝不足の目に、細かい字はまるで睡眠薬のよう。

「葉月ちゃん、疲れてる？ 目、真っ赤だよ」

デスクにカップのホットコーヒーが置かれると同時に、ぼんぼんと優しく頭に触れる手の平の重み。

視線を上げると、にこやかに微笑む山下さんの顔。

「山下さん……。すみません、ちよつと寝不足で」

昨日の事を考えると、なんとなく後ろめたい気持ちになってしまう。山下さんは軽く首を横に振ると、頑張つてね……とデスクに戻っていった。

深いグリーンのカードイガンに、黒のフレアスカート。

低いヒールのパンプスを履く姿はとてすつきりとしていて、大人の女性の雰囲気。

その右の薬指には、細身のリングが光る。

休みの前の日まではなかった、リング。

きつと、エンゲージリングなのだろう。

伊吹が見たら、悲しむだろうな。余計。

溜息をついて、書類に視線を落とす。

朝の六時。

伊吹をたたき起こして。

謝りまくる彼を、にこやかにそして強引に送り出したんだけど。

伊吹を前に、一睡も出来なかった。

いや、何も無くてものんきに寝ることなんて出来ない気がするけれど。

横に座りながら、ずっと伊吹を見ていた。

改めてみると、本当に変わったな。

思わず、笑みが零れる。

そうね、大人になったわ。

恋愛の事で、ここまで潰れてしまうなんて。

あの頃の伊吹は、恋愛よりも高校生活を……毎日を楽しく生きていくようにしか見えなかった。

七年間って、すごいな。

あんなかわいかった伊吹を、こんなにも変えてしまっただから。

私は……あの頃から何か変わった？

自分を見失うほどの恋愛なんて、したことない。

恋愛が全てではないけれど、例えば何をおいても優先したいこと。

……それさえも、思いつかない。

「葉月ちゃん、そろそろ会議よ？ 行ける？」
ふつと現実を引き戻される。

「あ、はい」

手元の資料をかき集めて席を立つ。
自分でも凄いなあと思うんだけど、考え事しながらでも手は動いて。

まあ、単純作業だからってこともあるんだけど、資料はまとめ終わっている。

「宮下さん、大丈夫ですか？」

経理チーフの椎名さんが、同じく資料を手に持って私の後ろを歩いてきた。

「うん、大丈夫。寝不足ってだめね」

「よければどうぞ？ 私二つ持っているの」

彼女はミントのタブレットケースを、私の方に出す。

お礼を言って手に取ると、そのまま一粒口の中に入れた。

ミントのいい香りと辛さが、口に広がる。

「ありがとう、目、覚めたわ」

そう言っただけ振り返ると、微笑む彼女。

頑張らなくちゃ。

今は、仕事の時間。

切り替えなくちゃ。

周りに聞こえないように息を吐くと、ぐっ……と前を向いた。

第十六話 本心

「では、会議を終えます。各自資料を確認しておいてください」
佐々田さんが手元の資料をまとめながら、立ち上がる。

「うう、肩こったあ。佐々田さん、本社のラウンジ行こうよ。お昼にしよ、お昼」

山下さんが資料を片手に歩み寄ると、その横で体を伸ばしていた黒田さんがガスツ……と彼女の頭に手を置く。

「俺は誘わんのかい」

「どうせ来るじゃない」

「あ、俺も。先輩、なんか奢って」

そこに間瀬くんが口を挟むと、隣の遠藤くんが頷いた。

「ときに山下さん、その薬指はなんですか？」

「え？」

山下さんは、一旦ぱつと右手を背中に隠したけれど口元を緩めて笑う。

「……そう言うことだから。反対に私に奢りなさい」

幸せそうな、笑顔。

幸せそうな、声。

一気に会議室が騒がしくなる。

「山下さん、ご結婚なさるんですか？」

椎名さんが駆け寄ると、山下さんは一瞬佐々田さんを見て頷いた。

「うん。来月、籍、入れるんだ」

「一つ一つの言葉を、ゆっくりと言う。」

「えらく急ですね？」
と、遠藤くん。

山下さんは恥ずかしそうに視線を中にさまよわせながら、ほら……と呟く。

「式はまだ出来ないけど、籍だけでも入れてしまえば相手の異動先が変わるでしょう？」

その一言で、急な入籍の事情を理解する。

通常棚卸し時期に異動の辞令が行なわれる。

棚卸しは、二月と八月。

前回この事業部が集められたのも、八月の異動辞令だった。

この会社は全国に支店を持つ会社としては珍しく、単身赴任の強制はない。

例えば上級の職位を持てばありうるかもしれないけれど、本人の希望が優先して考慮される。

地方への異動があったとしても、通える範囲内に夫婦が一緒に異動する。

ということは、二月より前、異動の決定がある前に籍を入れれば同じ地域にいられるということ。

反対にそれを逃すと、半年後の八月まで待たなければならない。

「私、ほら、部長になっちゃうから。忙しくなったら、結婚どころじゃないし。だから、その、急なんだけど……」

「じゃ、お祝い!!」

間瀬くんの一言に、遠藤くんと佐々田さんがわぁいと手を叩く。

「夜、いつもの居酒屋に集合!」

そう言くと、遠藤くんが携帯を取り出した。

どこに電話をかけるのかと思ったら、当たり前といっちゃ当たり前な人。

そして、本当はその人じゃなければいいと思っただ人。

「あ、田所？ 今日の夜、空けとけ。山下さんの結婚祝いするぞ」
何を話してるのか幾つか会話をしたあと、携帯をポケットにしまった。

田所さんに電話したなら、必然的に伊吹も来るんだろう。
考えるだけでも、気が重くなる。

「じゃ、とりあえず前祝。ラウンジ行きましょうか」
そんな私の心中を知らず、楽しそうに山下さんの背中を押す間瀬くん。

二人を見ながら、笑う佐々田さんと黒田さん。

私もその場の雰囲気には溶け込むように、満面の笑みを浮かべ山下さんにお祝いを言う。

そのまま会議室を出て一階まで降りた時、椎名さんが私の手を掴んだ。

「私たちは夜、ご一緒させていただきますね」
につこり笑って皆を見る。

その綺麗な凜とした声は嫌な雰囲気も醸し出さず、一番先を山下さんと行く間瀬くんが何でもない様に振り向いた。

「そうだな夜はいっぱい食わせてやるから、よろしくな。椎名、宮下」
そのまま、ビルを出て行った。

私と椎名さんは、そのまま総務・経理室に入る。

総務と経理に人が残るのは当たり前。
今日は私たちと山下さんの出勤だけで、残りの二人は休日。
山下さんが行くのなら、私たちが残ってもおかしくない。

内心ホッと溜息をつきながら、椎名さんを見た。

「ご飯食べよっか」

すでにお弁当をデスクに置いた椎名さんは、私の声に頷くと部屋の隅においてあるポットへと足を進めた。

「宮下さん、お茶でいいですか？」

「うん、ありがとう」

椎名さんのデスクに、自分の椅子を寄せて座る。

私は駅ビルで買ってきたお弁当を広げた。

「椎名さん、お弁当作ってきてるんだ。偉いね」

椎名さんは私の目の前にお茶の入ってマグカップを置くと、少し恥ずかしそうにお弁当を広げる。

「節約ですよ、節約」

「偉いね、料理は出来るにこしたことないよね」

一瞬、無言になって。

「宮下さん、何かあったんですか？」

少し伺うように、椎名さんが言った。

お弁当に視線を向けていた私は、そのままの体勢で聞き返す。

「ごめんね……、分かりやすすぎ？」

「分かりやすいというか、ただ、いつもより表情が硬いというか、すみません、私がおんなこと言う立場じゃないんでしょうけれど、辛そうに見えたので」

思わず、口を噤む。

話を、誰かに聞いてもらいたい。

自分も、伊吹も、山下さんも知っている人に。

聞いてもらって、今の自分の立場を理解してもらって……

思わず至った考えに、一瞬目を見開く。

「宮下さん？」

「あ……、うん。ちょっとまだ、自分でもよくわかんないから。その……」

言いよんでいる私を見て、椎名さんは小さく頷いた。

「すみません、立ち入ったことを。でも、私でよければいつでも使ってください」

そうにつこり笑う彼女は、すぐになんでもない世間話に話を切り替える。

私は内心ホツとしながら、少し残念がりながら、彼女の話に耳を傾けた。

椎名さんは、一つ下の二十四歳。

年齢よりも若く見えるのは、しているのかわからないくらいの薄化粧のせいかもしれない。

鼻筋の通った、凜とした表情。

年下なのに、包容力というかとても安心感があった。

いい意味で、上に立つ人の雰囲気を持っている。

「あ、ちょっとすみません」

彼女の鞆から携帯のバイブが聞こえてくる。

携帯を手にとると、そのまま部屋から出て行った。

部屋のドアが閉まるのを、じっと見ていた。
彼女の姿が、向こう側に消えて。

私、彼女に甘えたいって思った。

今の自分の立場を理解してもらって……

……可哀相って同情して欲しいって……

自分に嫌気がさす。

私、こんな女だった？

もっと、しっかりした人間だったはず。

昔から、年齢よりも大人っぽく見られてた。

高校の頃、ずっと風紀委員をしていた。

先生方からも、一目置かれていた。

なんでもないように振舞っていたけれど、少し優越感を感じていたのは否めない。

むしろ、なんでもないように振舞うことでより一層優越を振りまいていたのかもしれない。

慕ってくれていた伊吹の存在も……

そこで、ふと、思いつく。

伊吹の存在も……優越感……だった？

皆に人気のある、伊吹が
無邪気に私を慕ってくれて

その彼に、葉月先輩といわれる、優越感

先輩と呼ばれる山下さんに嫉妬したのも、独占欲じゃなくて優越感
を……プライドを刺激されたから？

伊吹が、じゃなくて。

顔に、さっ……と血が上る。

ただの、子供だ。

私が一番ってふんぞり返ってる。

ずっと子供のままのプライドで生きてきてたんだ。

恥ずかしい

「外、いいお天気ですよ。風は冷たいですけど」
ドアが開いて、椎名さんが入ってくる。

私は、彼女を見て笑う。

「そうなんだ。部屋の中になると、分からないよね」
表情を、作り上げる。

椎名さんは椅子に座ると、食事を再開した。

私は話に相槌を打ちながら、彼女を見ていた。

椎名さんのようになりたい。

そして山下さんのようになりたい。

見栄やそう言うのじゃなくて、自分らしい自分になりたい。

あの頃の自分じゃなくて、変わっていない自分じゃなくて、自分らしく生きたい。

こんな、くだらないことで悩む自分はもういい。

伊吹の事、何のためらいも無く一人の後輩として見られるように。後輩として、話を聞けるように。

そう、決めた。

第十七話 事業部の中の輪

「山下さん、ご結婚内定おめでとうございます〜！」

「内定つて何よ、内定つて」

乾杯と叫ぶ皆の声と、重なるような山下さんの突っ込みの言葉。

「相方さんはこっちにいないんですか？」

椎名さんがグラスを持ったまま山下さんに問うと、彼女はホツとしたように笑う。

「今日の朝、向こうに帰ったわ。いなくてよかった。いたら、勢いで呼び出されそう」

「確かに」

苦笑いで顔を見合わせる二人に、残念そうな間瀬くん表情。

「ホント残念ですよ。昨日のうちに言ってくれば、皆に集合かけたのに」

「昨日は両家の顔合わせだったんだから、無理無理」

佐々田さんが手を振りながら、意地悪そうに笑う。

「じゃ、まあコースとか頼んでるわけじゃないんで、適当に頼んじやってください、というか適当に頼みます」

そういうと、間瀬くんはメニュー片手に座敷の入り口で店員さんを呼び止めた。

事業部でよく来る居酒屋は、小上がり席よりも個室になった座敷が多いので、少しくらい騒いでも周りに迷惑をかけることがない。

以前通っていたお店は、間瀬くんが騒ぎすぎて行けなくなったらしいことは遠藤くんからの情報。

休みだった総務と経理の子も、間瀬君に呼び出されて嬉しそうにやってくる。

「でもなあ、こんなはねつかえりがこんなにはやく片付くとは、あの意味感慨深い」

黒田さんがビールをあおりながら、しみじみと呟く。

「お父さんみたいだね、黒田くん」

佐々田さんがそう言う。

「確かに。結婚式で泣きそう」

山下さんが真顔で頷いて。

「泣くか。喜びすぎて踊りだしちまいそうだ」

黒田さんがにやりと笑って、ビールを飲み干す。

「おい、間瀬。ビール追加」

それを見ていた遠藤くんが、オーダーを終えて戻ろうとしていた間瀬くんを呼び止めた。

「黒田さん、もっと早く飲み終わってくださいよ。世話かかるなあ」
面倒くさそうに頭をかきながら、間瀬くんは歩き始めていた店員さんを呼び止める。

この事業部を一から立ち上げたメンバーは、とても仲がいい。

外から入り込めない、雰囲気。

あえて踏み込もうとは思わないけれど、いいなと思う。

「住むところとか、もう決めてるんですか？」

とりあえず、質問攻撃。

山下さんは、戸惑ったようなそれでも嬉しそうな表情で答えている。

私も一緒に笑いながら、意識は少し離れたところで冷ややかに見ている。

……よく、そんな嬉しそうに話せるなあ

隣に、佐々田さんがいるのに。
自分の為に、苦しんでいる人もいるのに。

私なら、きつと無理。

職場にもエンゲージリングはしてこないだろう。

「システム管理の二人組が、やっと来ましたぜ」
トイレにたっていた間瀬くんが、田所くんと伊吹を引き連れて戻ってきた。

「遅れましたー、山下さん、ご結婚おめでとーございます〜」

田所くんの陽気な声と、伊吹の笑顔。

田所くんは手に持っていた紙袋を、山下さんに手渡した。

「部長以下シス管からお祝いです」

「えっ、悪いなあ。ありがとう」

山下さんは受け取ると、中を見て笑う。

「何よこれ。ちよつと、嫌味〜？」

言葉は嫌がりながらも、嬉しそうに中身を引っ張り出す。

中身は家庭料理の基本をまとめた、分厚い本。

「仕事だけじゃ、男をつなぎとめられないぞー、だ、そうです」

「でも助かるわ〜。料理そんなに上手くないのよ。お礼言っとてね」
苦笑いしながら紙袋の中に本をしまいこむ。

田所くんたちは、そのまま必然的に入り口の近くの私の横に座った。

「お疲れ様〜、部長が決めたの？ そのお祝い」

田所くんは近くにあったお絞りを手に取ると、頷いて少し眉をひそめた。

「でも、俺達で買いに行っただんだけ？ 凄く恥ずかしかった。な、

伊吹

横に座った伊吹を見ると、頷きながらもその視線は私に向けられる。

「あの、葉月先輩……」

話し出しそうになる伊吹の言葉を遮るように、横から間瀬くんがやってきた。

「ほら、伊吹もなんか飲めよ」

ぼんと伊吹の肩を叩きながら、田所くんと伊吹にメニューを差し出す。

「間瀬、お前本当に面倒見いいなあ」

机の向こう側に座っている黒田さんが、感心したように呟く。

「でしょ？ 褒めてもいいですよ」

得意そうに背を反らすと、黒田さんは珍しくにつこりと笑った。

この人はめつたに笑わないけれど、その笑顔はとても優しくて格好いい。

「女みてえ」

私は、田所くんと思わず目を合わせて笑う。

間瀬くんはにやりと笑って、黒田さんを見下ろす。

「付き合っただけてもいいですよ、仕方なく」

「佐々田がいるから、いらない」

横から腕を伸ばして、佐々田さんの肩を抱いて引き寄せる。

「うわっ」

横を向いて山下さんと話していた佐々田さんは、びっくりしながらも手に持ったグラスの中身が零れないように慌てて両手で持つ。

「ちよっ、セクハラ！ 佐々田さんは私の！」

山下さんが引き戻すように、反対側から両腕で抱きしめる。

「じゃ俺も」

手を伸ばそうとした遠藤くんの手を、黒田さんが遮る。

「それは許さん」

「マジです。目がマジです、この人」

けたけたと大笑いする間瀬くん。

「佐々田さん、大人気ですね」

田所くんがそう言うと、佐々田さんは困ったように笑う。

「おふざけがすきななのよ、皆。でも私、そんな皆が、大好きなの」

「でも一番好きなのは梶さん」

間瀬くんの言葉に、佐々田さんの顔が真っ赤になる。

「わっ、私の話はいいでしょっ。ほら、山下さんっ。そっちに話題を戻してよっ」

山下さんは、眉を少し上げて頷く。

「あのね、きつと皆思ってることだから。ちゃんと言おうと思っの」

第十八話 山下さん

今までののはしゃいでいた声音と、まったく違う落ち着いた声。皆も、雰囲気の違いに一瞬にして黙る。

「多分、ここにいる人達も知ってるよね？ 私の相手が、佐々田さんの元彼氏だったこと」

「……山下さん？」

意味が分からずに、佐々田さんが彼女の名前を呼ぶ。

山下さんは少し苦しそうに目を瞑って、話し出す。

「私達だけの問題だから別に言うことは無いんだろうけれど、それでもちゃんと話しておきたいって思ったの。事業部は、私の大切な場所だから」

山下さんは、佐々田さんを見つめている。

「佐々田さんと和弘くんが別れたの、きっかけは私。皆が知っている通り、私は佐々田さんから和弘くんを奪ったの」
「おちゃらけている間瀬くんさえ、今は口を噤んで黙って聞いている。」

「それでも、佐々田さんは私に幸せになってって言うてくれた。私が彼女を苦しめたのに、彼女は私に幸せになってって、許してくれた」

少し、震える声。

佐々田さんの横から黒田さんが手を伸ばして、軽く頭に触れる。

山下さんは黒田さんを見て頷くと、再び佐々田さんを見る。

「きつと、私なら出来ない。そんなこと言えない。佐々田さんだっ

て、本当はとても辛かったはず。それでも幸せを願ってくれた彼女に、今回結婚の事を一番に伝えたの。そしたらね、凄く喜んでくれたの。おめでとう、よかったねって」

佐々田さんは、何も言わずにじつと山下さんを見つめ返している。

「少しでも後ろめたく思っていたってことは、私、心から佐々田さんを信じていなかったんだなって……。佐々田さんは、私を祝福してくれるのに」

山下さんの目から、すうつと涙が零れる。

佐々田さんは、右の親指でその頬を伝う涙を拭った。

「まだ、気にしてたの？ もう一年も経つのに」

「佐々田さんは、私のせいで和弘くんと一緒にいた五年間を終わりにしてしまっただじゃない。一年なんて、短すぎるわ」

今まで、我慢していたのかもしれない。

山下さんの目から、零れる涙は止まらない。

「佐々田さんが許してくれても、周りが許してくれないって思ったあの時あなたがおめでとうって言うてくれなければ、この指輪だって会社にしてこないつもりだった」

そこまで言われて、私の頭からすうつと血が引いていく。

さっき、私が思っていたこと。

よく、職場に指輪してこれるなって……

……周りが許してくれない

私は、その、周りの一部

「でも、佐々田さんがおめでとうって言うてくれた時、本当に嬉しくて。周りなんかどうでもいい、あなたに許してもらえれば。あなたがおめでとうって言うてくれればそれでいいと思ったの。だから……」

ふっ……と周りを見渡す。

「きつとね、皆、嫌な気分なんじゃないかって思ったの。噂はかなり広まっていたから知ってるだろうし、その当事者二人を目の前にしておめでとうって言わなきゃいけないの、嫌だろうなって」

誰も、口を開かない。

「だから、ごめんね。文句だってなんだって、言うてくれて全然いから」

佐々田さんが、山下さんの身体を両手で包む。

「皆が大変だろうなって思ったから、ここで言ったの?」

「うっん、それ以上に自分が辛かったの。やっぱり私、自分勝手なのよ」

佐々田さんは、山下さんの頭をやさしくなでる。

「私は、あなたが幸せになってくれればそれでいいのよ。和弘を、幸せにしてね? 私にとっては、和弘もあなたも大切な友達なんだから」

「佐々田さん……」

呟く山下さんの言葉を、間瀬くんが遮った。

「 山下さん、確かに俺、気になってました。いいのかな、佐々田さんいるのにつて」

うっわ……、直球。

間瀬くんの言葉に、一斉に視線が集まる。

「でも、佐々田さん見てくださいよ。普通に喜んでるし。俺は噂しか知らないけど、きつと山下さんと佐々田さん、それに相手の間にしかわからないことがあるんだなって。事実だけで、人は判断できないなって、この事業部に来て思いましたよ」

そりゃ、最初はどうしようかと思ったけどと笑う。

「な、遠藤」

話を振られた遠藤くんは、ゆっくりと頷いた。

「周りがどう言おうと、俺は気にしません。俺達は、“山下さん”を知ってますから」

いつもあまりしゃべらない遠藤くんのその言葉は、しっかりとした重みがあった。

佐々田さんはゆっくりと山下さんの身体を起こすと、目を合わせて微笑む。

「もう泣かないの」

黒田さんが新しく貰ったお絞りを、山下さんに手渡す。

山下さんはゆっくりとそれを手に取ると、頷いて周りを見た。

「ありがとう」

一人ひとりと目を合わせる。

そしてお絞りで目を拭くと、嬉しそうに微笑んだ。

その途端、間瀬くんが立ち上がる。

「では仕切り直し！！ ご結婚おめでとーございます！」
近場のグラスを手に持って、わぁっと乾杯をする。

ちらりと目の合った伊吹は、本当に喜んだ表情。

大人……ね。表情に出さずに、祝えるなんて。

昨日、あれだけ潰れていたのに。

「じゃあ、いつその事佐々田さんもご結婚へ！」

「まだ許さん！」

間瀬くんの言葉に、黒田さんの一喝。

「親父じゃないんだから」

呆れ顔の間瀬くんと、大笑いする山下さんと佐々田さん。

「おちよくるのが面白いんだ、こいつら二人。今度、梶つれてくるか？」

「是非是非！」

「ちよつ、それ無理だから！」

佐々田さんが慌てて却下する。

「梶さんて、どんな人なんです？」

田所くんが話を振ると、そのままなぜか梶さんの話が変わっていった。

第十九話　そこで何を思う

うっ、飲んだなあ

宴会を始めてもう二時間近くたった頃トイレに立った私は、昼に椎名さんからもらったミントのタブレットを取り出して口に入れた。

二日連続の飲みは、やっぱり厳しいな。

酔いの回ってきた身体を、何とか奮い立たせて外に出る。

この居酒屋はトイレが入り口近くにあるから、涼しい風が流れてくる。

……ちょっと位、席、はずしても大丈夫だよな？

そっと入り口のガラス戸を空けて外に出ると、冷たい風が頬を撫でる。

ビルの十階に入っているこのお店の前は、最上階ということもあってほとんど誰も通らない。

ドアの前は少し広いエレベーターフロアになっていて、その脇に非常階段に続く扉がある。

そのドアは大体いつも開いていて、外階段になっているから見晴らしのいいことこの上ない。

階段の踊り場で、手すりに頬杖をついて夜の町並みを見下ろす。

まだ九時すぎ。東京では宵の口。

長く続くテールランプとヘッドライトの赤と白の光が、網目のように眼下に広がる。

遠くに流れる光の粒や人の流れをじっと見つめながら、辺りも憚らず溜息をついた。

正直もう勘弁して欲しい。

早く帰りたい。

本当に心からお祝いしたい自分と、どうしても伊吹を気にしてしま
う自分がいて。

どっちが本心なのかって言われれば、よくわからないんだけど。
それでも、伊吹がにこやかに話しかけているのを見て嫌な気持ちに
なるのは、少なからず本心だと思う。

自分らしい自分ってなんだろう。
どの自分が、自分なんだろう。

なんだか、禅問答みたい。

「葉月先輩、酔ったんですか？」

「っ」

いきなり後ろから声をかけられて、びくりと肩がすくむ。
振り返らずにいと、隣に伊吹が立った。

自分の横に置かれる大きな手と、Yシャツの白さが目の端に映る。

「あの、先輩？」

「何？」

心の、準備がまだ出来ていない。

伊吹を、ただの後輩として話すのってどうすればいいの？

あの頃の伊吹と、私、どう話してた？

変な感情の入らない、ただの、人として……

じっと俯く私に、伊吹はぎゅっと拳を握る。

「すみません、葉月先輩。俺、昨日あんなに迷惑かけちゃって……。今日謝りに行くつもりで思ったんですけど、まさか飲み会になるとは思わなくて」

伊吹の言葉に、一瞬思考が止まる。

迷惑？

つて、なんだっけ？

すぐに思い当たって、それが……と納得する。

ああ、飲み潰れた奴ね。

うん、確かにちよつと迷惑といえばそうだった。でも、迷惑って以上に……

「あの、本当にすみません。俺、葉月先輩に甘えすぎて」

「おい、お二人さん。何やってんだい？」

伊吹の言葉を遮るような、後ろからの声。

伊吹が振り向いて、溜息混じりに返事をする。

「田所さん。別に何もしてませんよ。少し風に当たっていただけですよ」

歩いてくる田所さんの足音にせかされるように、私は後ろを振り向いた。

「いや、ちよつと飲みすぎちゃって。私、先に行ってるわね」

「え、先輩」

呼び止めようとした伊吹の声を無視して、田所さんの脇を通り過ぎる。

「大丈夫か？ 確かに顔が赤い」

「いや〜ね、烏龍茶でも飲もうかしら」

田所さんの鋭い指摘を茶化すように、そのままガラス戸を開けて中に滑り込んだ。

あせった。

昨日まで、別に伊吹が横にいようがなんとも思わなかったんだけど、物凄く緊張する。

きつと後ろめたいんだわ、私。

伊吹が純粹に先輩って慕ってくれてるのに、自分はそうじゃ無かったってことが。

伊吹の言う迷惑って言葉に、最初頭がまわらなかった。

迷惑かけられたことなんて、頭の隅に吹っ飛んでいて。

そんなことよりも、伊吹とどう接していいかばかり考えてた。

単純だな、私。

私は溜息をつくと、足早に皆のいる個室へと向った。

葉月先輩がいなくなった後、その場所に田所さんが寄りかかる。

上着のポケットからタバコを取り出して口にくわえると、火をつけたその先から紫煙が立ち上った。

「俺、邪魔した？」

田所さんは、何か含むような声音で俺を見る。
そんなことないですと呟きながら、内心深く溜息をついた。

確かに、昨日、俺やらかしました。

前に山下先輩が結婚するって聞いた時は、ショックだったけどそこまで実感がわかなくて。

そしたら、一昨日、山下先輩から彼氏が帰ってくることを聞いた。

突然、実感する。

そうしたらいてもたってもいられなくなった。

部屋で、一人でいるのが辛かった。

誰かに話したくて。

誰かに聞いて欲しくて。

頭に浮かんだのは、葉月先輩だけだった。

迷惑だつて分かっていたけど、それでもきつと許してもらえと思つてた。

よく、休みの日は駅の本屋に行くって聞いてたから、つい待ち伏せして。

見つけた時、心の底からホッとした自分がいた。

最初はそんなことじゃだめって言われたけれど、やっぱりちゃんと話を聞いてくれて。

俺が潰れるまで付き合ってくれた。

甘えすぎたかな。

呆れられたんだろうか。

自惚れ過ぎてたのかなあ、葉月先輩にとっての俺って存在に。

やっぱり、俺の中であの頃の先輩の印象が強すぎるんだろうか。

七年も離れていたんだから変わっていても当たり前なのに、どうにも昔のまま接してしまう自分がいる。

それが許されると思ってる、自分がいる。

あの頃の面影のまま、そこに葉月先輩がいてくれるから。

まだまだ子供なのかなあ、俺。

明らかに、昨日と態度が違うもんな。先輩。

謝ろうにも、タイミングないしさ。

いいや、とりあえず飲み会が終わったらそこで先輩を捕まえよう。

小さく溜息をついて、田所さんを見る。

「田所さんは、一服しに来たんですか？」

田所さんはくわえていたタバコを指先で挟むと、手すりに寄りかかった。

「まあな。今はタバコ吸わない奴の方が多いからな。この事業部でも、俺だけじゃん」

「確かに。システム管理だと、俺以外皆吸いますけどね」

あそこは肩身が狭くないと笑うと、田所さんはタバコを灰皿に落とす。

「お前、大丈夫か？」

「え？」

突然聞かれて、何に対してなのか分からず首を傾げる。

田所さんは少し声を潜めて、呟いた。

「お前、山下さんの事、好きなんだろ？」

「っ」

その言葉に、思わず絶句する。

田所さんはそんな俺の頭を、軽く叩いた。

「最近気がついたんだ。だから、誰にも言っただねえよ。って、わり。宮下にはいつちやっただけど。もしかして知ってた？ あいつも」

「あ……はい」

知らず、緊張したのか口から息が漏れる。

「ま、でもあそこまで語られちゃあ、諦めるしかねえわな」
苦笑い気味に肩をすくめる。

「俺達はまだあの事業部にきて三カ月くらいじゃん？ だから、悪いけどあいつらみたいにあそこまで盛り上がれないよな。ちよっと引いちゃった、俺」

「なんか、中学生日記をリアルに見てるみたいでした？」

俺の言葉に、噴出すように頷く。

「あいつらにとっては本当に真面目な話なんだろうけどな。山下さんも、こんなタイミングでもなきや言えないと思っただろ。だから、一応合わせといたけどな。嫌じゃないけど、あの輪にはどうも入れねえや」

確かにスタートから一緒の五人には、強い仲間意識を感じる。

どんなに入り込もうとしても、きつと最後の壁を越えられない。

「ま、俺達は第二陣で楽しめりゃさ。お前もゆっくりでいいから気持ち切り替えていけよ？ 宮下も心配そうだったから」

「え？ 葉月先輩、何か言っていました？」

一瞬、心臓がドクンと跳ねる。

田所さんは少し声の大きくなった俺を、驚いたように見た。

「いや、心配そうに見てたなっけくらい。なんで？」

思わず身を乗り出した自分を、ごまかすように笑う。

「いや、どうも葉月先輩の事になると俺、ガキに戻るみたいで。あはは、すみません。戻りましょっか」

頭をかきながら歩き出した俺の肩に、田所さんの手が乗る。

「お前、山下さんが好きなんだよな？」

「え……？ はあ、まあ。でも、もう失恋決定ですけどね」

俺の言葉に少し首をかしげて、肩に乗せた手でぼんぼんと軽く叩く。

「お前と宮下って、なんか似てる気がする」

田所さんは肩から手を外すと、そのまま店のほうに歩き出す。

「どういうことですか？ それ」

慌てて後を追いながら聞くと、田所さんは肩をすくめて笑った。

「そのまんまの意味だよ」

いくら聞いてもそれしか返ってこない返事に少しイライラしながら、頭の中では違うことを考えていた。

そういえば俺、さっきの山下先輩の話。随分冷静に聞いてたな。

昨日あれだけシヨック受けて、葉月先輩を頼ったのに。

頭ん中、どう葉月先輩に謝ろうってばかり考えてた。

お前、山下さんが好きなんだよな？

田所さんの言葉が、頭に繰り返す。

俺、山下先輩が好きだったんだよな。

そのために、この会社来たんだよな。

ホントは決まってた、システムエンジニアの職捨てて。

なのに、なんであんな話聞いてられたんだろう。

あれ……？

なんだかよくわからない自分の頭に、首を傾げるばかりだった。

第二十話 同期

「……お前ら、なんかあったのか？」

山下さんの、結婚内定？ を祝う会から既に一ヶ月。

十二月終りの事業部は、クリスマスの片付けと正月催事の立ち上げを間瀬くんと遠藤くんに任せて、佐々田さんと黒田さんは既にバレンタインの準備に追われていた。

一月に入りお正月関係の催事が終われば、すぐにバレンタインの催事が始まるらしい。

なんというか季節感を大切にしなきゃいけない雑貨店社員だけれど、こつも季節の早どりになると一番実感がわかないのも雑貨店社員って気がする。

山下さんは社内ベンチャーとして立ち上がる来春に向けて、総務とか経理とかを超えて事業部の顔として広報に勤しんでいる。

経理は年度末決算に向けて忙しかったし、システムも急がしそうでそれに漏れず、総務も忙しかったりするのだけれど。

あの飲み会の後、同じ方向の電車に乗るはずの私と伊吹だったけれど、当直のシステム管理課の社員から田所くんと共に呼び出されてそのまま会社に泊まったらしい。

そんなこともあって、あの後、伊吹と会う機会がほとんど無かった。

しばらくはなんて話そうとかいろいろ考えていたりもしたし、姿を見ればさりげなく避けたりもしてたけれど。

ビルから出る時だけ気をつければ、総務にいる限り伊吹と会うことはない。

例え総務にいても、自分の席から見える道路に伊吹の姿を見つければ、用事をこじつけて席を立ててしまえばよかった。

伊吹も忙しいのかそんなに回数も来なかったし、だから事業部の人たちも別におかしいと思わなかったみたいで、何の詮索もされていない。

伊吹に再会するまでは、本当の私って何？ なぁんて考えたこと無かった。

伊吹に対してだけおかしいのであって、あの子に会わなければ普通の私でいられる。
見たくない黒い自分のプライドや、変な風に人に嫉妬することもない。

普通の生活に戻れる。

そして山下さんや椎名さんのように、凜とした生き方を目指すんだ。

それに正直

もう、山下さんへの想いを聞くのがしんどかった。

私に用があるというならば、きつとそのこと。

謝った後に再開されるだろうそれを思うだけで、苦しくなる。

まあ、ずっと会わないわけにはいかないだろうけれど、しばらく時間が空けば、山下さんに対する伊吹の態度とか、そんなのも気にならなくなるはず。

そうすれば、必然的に私がヤキモキすることもなくなるのだ。

なんて、考えて。

気持ちの楽になった、そんな日の夜。

既、皆が帰ってしまった後。

私は一人残業に追われていた。

明日から、事業部は年末年始の休みに入る。

だから仕事を明日に残せないわけで。

まだ八時過ぎでそんなに遅くないとはいえ、さすがにビルに一人しかいないという心細さに躍起になって仕事を終わらせようとしていた私の前に、田所くんがやってきたのだ。

一瞬この中に一人じゃないっていう安心感にホツとしたけれど、彼の口から出た言葉に持っていたボールペンを思わず落としてしまった。

「な、お前ら、なんかあった？」

田所くんを見たまま固まっている私に、彼はもう一度問う。

その表情は、心配そうに眉を顰めている。

「宮下？」

何も言えず彼を見つめていた私は、名前を呼ばれて慌てて声を出した。

「えっ……えっと、何？」

心臓がばくばくと早鐘を打つ。

仕事の時だけしている眼鏡を、外しながら視線を泳がせる。

何か……？

いや、別に何も無いんだけど。だから、別に不審な行動をしなくてもいいんだけど。

伊吹を避けているっていう自覚がある以上、そして田所くんの言うお前らに伊吹が含まれているのが分かる以上、やっぱり動揺を隠せない。

田所くんはカウンターを廻って、私のデスクの横に立つ。

私は思わず椅子を引いて距離をとる。

そうやって見上げる彼は、溜息をつきながら横の壁に身を持たせかけた。

「伊吹の様子が、変なんだよね。あの、山下さんの飲み会以降さ腕を組んで溜息をつく。」

私はまた首をもたげかけた嫉妬心を、懸命に押さえ込んだ。

「そりゃ……そうでしょ。好きだった先輩が結婚決まっちゃって、あまつさえあんな思いまで語られちゃったら。そりゃ、悲しくもなるわよ」

言葉を選びながら、ゆっくりと呟く。

山下さんは、今月既に籍を入れている。

本来は浅川になるのだが、職場ではこのまま山下で通すらしい。

田所くんは私の言葉に、納得がいかないように首をかしげる。

「でもさ、なんかお前に言いたいことあるみたいだったじゃん。ま、俺が邪魔しちゃったようなもんだけどさ」

飲み会の時、伊吹と二人でいる所にきた事を言っているらしい。

私は、否定するように首を振った。

「いや 別に邪魔とかじゃなかったし」

山下さんへの想いを聞いて欲しいからだと思うなんて、さすがに言

えない。

「でも、お前に用があつて何回かこつちに来てなかつた？ たまに席はずすから、部長が首傾げてたけど」

「来てたみたいだけど、私、会つてないし。あのさ、私、明日から休みに入るんだよね」

これ以上、詮索されたくなくて視線をデスクの書類に移す。

無言の、訴え。

仕事あるから、早く帰つてくれないかなあつて。

田所くんは多分気づいているんだろうけれど、それでも帰らない。

「じゃあ、なおさらだ。今、ここに伊吹を呼んでもいいな？」

スーツの胸ポケットから携帯を取りだそうとした田所くんの腕を、思わず押さえる。

少しびっくりしたような表情で、彼は私を見下ろした。

「そ　それは、その……」

身体が自然に動いたとはいえ、やってしまった感は否めない。

田所くんはしばらく私を見ていたけれど、軽く息を吐き出して自分の腕に置かれた私の手を反対の手でぼんぼんと叩いた。

「何があつたのか言ってみろよ。少しは楽になるかもしれないぜ？

仕事終わるの待つてるからさ」

その優しい言葉に、少し考えて頷く。

楽になりたい。

本当は話すの嫌だけれど、誰かに聞いて欲しい。

伊吹もこんな気持ちだったのかな　、そんなことを頭の隅で考えていた。

第二十一話 それでも気付けない

仕事をさっさとまとめて、田所くんが待つ三階に向う。
一応、表玄関の鍵は閉めてきた。帰る用意も終えて、鞆も一緒に持ってくる。

三階にいる間に、一階に泥棒でも入ったら困るから。

三階の廊下の突き当りには非常階段があつて、その傍にはこのビルで唯一の灰皿がある。

そこで、彼は一服していた。

「終わったかー？」

いじっていた携帯を胸ポケットにしまいこむと、タバコを灰皿に落とす。

「うん。待っててもらつてありがとう」

私は鞆をベンチに置きながら、田所くんの向かいに座った。

田所くんは傍にある自動販売機で珈琲を買つと、私にも何かいる？

と目配せする。

私は紅茶のペットボトルを指差すと、彼は頷いてボタンを押した。

「はい、で？ 何があつたの」

私にペットボトルを渡しながら、ベンチに腰を下ろす。

暖房も切つてあるし、その上年末の夜。

暖を取るのは、温かい飲み物を買うしかない。

私はそのペットボトルをじつと見つめながら、これから言おうとすることを反芻する。

どう言えばいいのか。

どこから言えばいいのか、考えはまとまらない。

しばらくそんな私を見ていた田所くんは、少し溜息をついて背もたれに寄りかかった。

「伊吹の事が好きだって気づいたの？」

「え？」

考えてもいなかった言葉を言われて、思わずきょとんと見返す。彼の方こそそんな反応が返ってくるとは思っていなかったらしく、肩透かしを食らったような表情で私を見た。

「あれ？ 違った？」

「好き？」

私が、伊吹を、好き？

頭の中のはてなマークが、ぽんぽんと増えていく。

首を傾げる私に、苦笑い気味な田所くんの声が降ってくる。

「いや、まあいいや。で、何悩んでるんだよ。前言ってた、独占欲がどつろつて奴？」

俯いて、息を吐く。

ぼつりぼつりと、あの日の事を言葉にしていく。

山下さんの結婚を知って、伊吹が私を頼って来た日の事。いっぱい話を聞いて、酔い潰れた伊吹を部屋で寝かせて。

山下さんの為に、ここまで潰れる伊吹を見てて。

あの頃と本当に変わったなああって、実感して。

高校の時に一緒にいた伊吹は、常に私を先輩って慕ってくれていたけれど。

その言葉も立場も、今は、山下さんのもの。

伊吹が他の誰かを見ていることへの悲しさじゃなくて。

自分を見てくれない悔しさを、募らせていた。

伊吹の事が問題じゃなくて、自分のプライドを刺激されただけ。

「なんかね、黒いなあって。自分のプライドを満足させる為に、生きてきたのかなあって思ったら凄く嫌になっちゃって」

田所くんは新しいタバコを口にくわえながら、火をつける。

そんな様子を上目遣いに伺いながら、私は溜息をついた。

「そうしたらね、なんか伊吹とどう接すればいいのかわからなくなっちゃって。例え途中から私が優越感を感じていたにしろ、あの頃は伊吹をただの後輩って見てたからその頃を思い出せばいいなと思ってる」

両手で、ペットボトルをぎゅっと握る。

ホットのそれは、手をほんわかと温める。

「そんなことを考えていたら、私を純粹に先輩として見てくれてる伊吹と会うのが、なんだか恐くなっちゃったのよ」

「会ってみなきゃわかんねえこともあんじゃない？」
会ってみなきゃ……？」

田所くんの言葉に、俯く。

「会ってね、確かに何か変わるかもしれない。でも、一番言っちゃいけない事を、言ってしまったらもうそれで」

それは、辛い。

あの子を、傷つけたくはない。

「言っちゃいけない事　ねえ。それって、そのプライドがどうのよりきつい事？」

「　うん」

田所くんは呟く私から視線をはずして、煙を吐き出す。

その煙の行方を追うように視線を動かしていた私に、彼は唸りながら話した。

「なんかさ、ま、要するに　。宮下は、山下さんの話を聞きたくなくて伊吹から逃げていて。その理由が、その話を聞いていると自分を見てくれないから悔しく感じるからと。そう感じるってことは、自分のプライドを満足させる為に、伊吹という存在を利用していたように思うから……？」

ゆっくりと私に確認するように呟く彼は、最後まで言い終えた後呆れたように溜息をついた。

「それってさ、伊吹の事が好きだけじゃん。違う？　大体、プライドとか関係ねーだろ」

「　え？」

田所くんは指先でタバコを挟むと、灰皿に押し付けてもみ消す。さっき買った珈琲を一口のみ干すと、もう一度溜息をつく。

「誰だってさ、一緒にいるのに理由ってあると思うよ？　純粹に友

達っていったって、そいつと一緒にいると楽しいからとか、気が楽だからとかそんな理由あるじゃん」

少しイライラとした口調に、私は押し黙る。

「宮下が伊吹と一緒にいた高校時代なんて、俺知らないけどさ。再会した時のあの伊吹の喜びようを見て、いい関係だったんだなあって少し羨ましかったぜ？」

例えお前に優越感とか独占欲とかそんな感情があつたとしても、それでも伊吹にとっては憧れの先輩で。

「あいつだって、お前といることに優越感を感じてたと思うけどな」

「？ 人気のあつた伊吹なら分かるけど、私は別に」

田所くんが立ち上がったのを見て、思わず口を閉じる。

向い合わせのベンチなので、立ち上がられると物凄い威圧感。

それじゃなくても身長差、あるのに。

「もしお前の言い分が正しかったとしたら、俺、相当嫌な奴だと思っただけど」

「え？」

立ち上がった彼の両腕が私の横を通って、ベンチの背もたれにつく。

「ちよっ……田所く」

思わず上ずった声になりながら見上げると、そこには私を見下ろす真剣な表情。

一瞬見なきゃよかったと後悔しても、遅い。

逸らすことの出来ない視線に、身体が固まる。

「俺は、お前の事が好きだからこうやっていい人演じてるんだぜ？」

ただ純粹に、なんの感情も無く人と付き合う奴なんて、いるわけねえよ」

す……き……？

え、何？

何も言えずにただ見上げる私を、ただ見つめる田所くん。

「好きになってくんねえかなーとか、あわよくば付き合えねえかなーとか。そんなこと、考えてますけど？」

俺、黒い？

そう首を傾げる田所くんは、笑っているのにそう見えない。

「じゃあ、好きじゃなかったら一緒にいないのかといわれれば、それも違うな。宮下は見てて飽きないし、話してて面白いし、自分が落ち着くから“特別な存在”としてじゃなくても友達っていう場所はキープしておきたいとか思ってる」

喉が、渴いて、はりついたように声が出ない。

でも、声が出て、何を言っているかわからなかった。

自分の嫌な性格を話して、楽になろうとしたんだけど、それは当たり前のことだっというわかれ。

え、と。

今、もしかして、告白、されてますか？

そんな、間の抜けたことを聞いてしまいそうになる。

田所くんはしばらくそうやって私を見ていたけれど、携帯の着信音にベンチについていた手を離れた。

そのまま私の前から一、二歩横にずれると、胸のポケットから携帯を取り出して、画面を確認する。

メールだったのか返信をして、携帯を閉じる。

「ま、そう言うわけだから。お前は別に黒くも赤くもない、ただ生真面目なだけだよ」

私はやっと威圧感から解放されて、内心ホツとしながらその言葉に首を傾げる。

「生真面目？」

彼は、そう、と呟く。

「伊吹が山下さんの事を話す。伊吹が山下さんを想って酔いつぶれる。それを見て苦しくなったのは、優越感とか独占欲とかそんなじゃないと思うぜ？」

「だって」

言い返そうとした私の言葉を、片手を上げて制する。

「ただ伊吹に、自分を見てもらいたいただけだろ？それが頭ん中で恋愛感情に結びつかなかっただけ。確かに想い出は大切なものかもしれないけどさ」

そのまま非常階段の扉を少し開ける。

「お前ら二人とも、“あの頃”に囚われすぎ。“^{いま}現在”は“あの頃”に変わった“^{むかし}過去”じゃないんだぜ？ あの頃の私なら、あの頃の先輩なら。そんなんじやお話にならないね」

「田所くん」

何も、言い返す言葉がない。
あの頃に囚われすぎ……か。

「確かに、そう、かも」

小さな声で、そう呟くと、田所くんは頷いて笑った。

「だから、ちゃんと話すべきだと思うんだよね。
関の鍵閉めてきてたんだ」

宮下、玄

「え？ う、うん」

そのまま、非常階段の扉を大きく開く。

「なっ」

思わず、小さく叫ぶ。

「下の鍵、閉まってるなら、先に、言ってくださいよ……」

扉の先には、肩で息をしている伊吹の姿。

この寒い中、額に汗をかいている。

田所くんはうははーと笑いながら、伊吹の背中を叩いた。

「だから非常階段の鍵開いてること教えてやったる？全力疾走お疲れ」

「ちよつと、田所く」

「だーから」

伊吹の背中を押して中に入れると、入れ違いに自分は非常階段へと歩き出す。

「あの頃とか言わないで、ちゃんと今の二人で話せて。お前ら見てると、なんだか歯がゆい」

そのまま、片手を上げて扉を閉めた。

第二十二話 先に気付いたのは

薄暗い廊下に取り残された私達は、音を立てて閉まった非常階段の扉をじつと見つめていた。

いや、話さなきゃいけないのは分かってるんだけど、
今？
まだ、何の心積もりもしてなくて……

伊吹は、後ろを向いたまま肩で息をしている。

ここは一つ

そろりと音も立てずに後ずさる。

逃げしておくか

階段までは……難しいな、そこまで行くの。

今、会議室の横の廊下に立っでいて。

斜め後ろにある会議室の引き戸は、開いたまま。

そこしかない。

ゆっくりと足を動かして、斜めに後ずさっていく。

パンプスじゃなくてよかった。

仕事中は、ナースサンダルを履いているからヒールと違って音が漏れない。

ちらりと伊吹の方を見ると、まだ後ろを向いたままだった。

多分、あっちもどう話そうか考えてるんじゃないかしら。

いまのうち、いまのうち。

驚くだろうけど、見つからなきゃ諦めるでしょ。

今へたに話すと、よくわからないこと言ってしまういそうだから。

後ろにずらした左足が、会議室の戸の内に入る。

そのまま身体ごと、部屋の中に滑り込んだ。

そこは、いつも佐々田さんや黒田さんが使っている部屋。

電気は消えていて暗いけれど、窓の外から入ってくる他のビルの明かりや微かだけど月明かりで薄暗い程度にはなっている。

「あれ……？ 葉月先輩？」

びくっ

慌てて傍にあったロッカーの影に隠れる。

「え、ちょっとどこに……」

困惑したような焦った声。

廊下に響く、革靴の音。

会議室の中を覗き込んでいるらしく、戸の辺りで伊吹の音がする。

私は、ロッカーとサンプル棚の隙間にこれでもかと身体をねじ込む。

そのままサンプル棚にかけてあった布を少し引っ張って、自分の身体を隠す。

その途端、会議室の電気がついた。

心臓が、ばくばくと早鐘を打つ。

お願い、気がつかないで。
今話したら、きっと伊吹を傷つけてしまう。
きっと、あの頃の思い出を、崩してしまう

「葉月先輩？ いるんでしょう？」
会議室の中を確かめながら歩くその足が、私の前で止まる。

隣のロッカーを開けて確認すると、ドアを閉めながら私が隠れているのと反対側の布をめくった。

「いない……か。こんなに逃げ足速かったっけ、先輩って」

そうそう、ここにはいないから！ 早くいなくなつて
息を殺して、伊吹がいなくなるのを待つ。

「下に行ったのかな」

一人呟くと、電気を消して廊下を走り去っていった。
階段を下りる音を聞きながら、押さえていた息を吐き出した。

そつと会議室から出て、さっきのベンチまで戻る。
そこにある自分の鞆から、大きめのメモ用紙を取り出して伝言を残す。

「ごめんなさい。戸締りをお願いします。
鍵は、田所くんに渡しておいてください。」

その上に、非常階段の外鍵を置く。

階下では、私の名前を呼ぶ伊吹の音がする。

ごめん、伊吹。

ここまでされれば、さすがに伊吹も私の事を嫌いになるかもしれない。

それでも。今は、ごめん

言っちゃいけない、

言葉を　　伝えてしまわないように

そのままドアを開けると、非常階段から外へ出た。

「よっお伊吹、おかーりー」

本社のシステム管理室に帰ると、田所さんがPCを前にパンを食べ
ていた。

宿直だった俺の代わりに、システムを見ていてくれたらしい。

「どうも……」

ありがたいと思いつつも、今の心境じゃ少しも笑えない。

田所さんの隣の自分の席につくと、なんだか一気に力が抜けた。

「おや、その様子だと話し合いは決裂してしまったのかな？」

心配そうな言葉とは裏腹に、からかっているような口調に思わず睨みつける。

「なんだよー、お前の話聞いて一肌脱いでやった先輩に対してその態度」

やっぱり面白がってるじゃないかと、がっくりと肩を落とす。

「決裂以前に、……逃げられました」

俺の言葉に、田所さんの手からパンが転がり落ちる。

「え　？　あの状況で、逃げられた？　どうやって……」

パンを拾おうともせず、口をあんぐりと開けたまま俺を見る。

俺は、その顔を横目で見てまた俯いた。

「振り向いたら、いませんでした」

「いや、あそこ会議室しか隠れるところないじゃん　」

「探したけどいなくて、下の階見に行ってる間に非常階段から帰ったみたいですよ。外鍵とメモが置いてあったので。」

田所さんに鍵渡しといってくれて」

ポケットから鍵を出して、田所さんに渡す。

一瞬の沈黙

そして盛大な田所さんの笑い声

「だっせーっ！　マジで？　マジで逃げられちゃったの！？　ありえねえって！」

「仕方ないじゃないですか！　逃げられたもんは！！　もうあったまきました。いいです、俺、明日の朝、総務で待ってます！」
「がしがしと片手で頭をかくと、

「そりゃ無理だ」

と田所さんがあっさりと却下する。

「だって事業部、明日から年末休業だもん。年明け三日からしか出てこないぜ？俺らは交代で出てくるけど、他は違うの忘れたか？」

「え？」

俯いていた顔を、田所さんに向ける。

あまりにも間抜けな顔をしていたのだろう、大笑いしながら落ちたパンを拾い上げた。

「だから今日、俺が一肌脱いでやったんだろーが。まさかこんな結果になるとはね」

止まらない笑いを止めようともせず、机をバンバン叩いて面白がる田所さんを睨みつける。

「じゃあいいーです、分かりました！俺、今日の宿直終わったらそのまま葉月先輩んちにいってきますー！！」

「宿直終わったらって、お前明日の夕方まで当直じゃん。夜に女んち押しかけるの？」

！

「ああああっ！」

そうだった！いつもなら翌日の朝には終わるのに年末休を皆ずれてとるから、残った奴にしわ寄せがやってくる。

自分もそうやって休みを取るから、文句は言えないんだけど……

「お前さ、ここまでされても宮下と話したいの？」

両手で頭を抱えていた俺に、やっと笑いのおさまった田所さんが不思議そうに呟く。

「え？」

田所さんはそのまま椅子の背もたれに寄りかかる。

「だってさ、何度会いに行っても逃げられてさ。そこまでされてもお前、宮下とまだ話したいの？」

田所さんのその言葉に、ふと、気づく。

確かに。

山下さんの事で迷惑をかけた翌日から、葉月先輩とほとんど話していない。

総務にも会いに行っただけど、その度どこかに行っただ。

携帯知らないしメルアドも知らないし、駅で待ってみたことも何回かあったけどそれでも会えなかった。

ま、確実に避けられてるわけで。

しかも、今日のあれ。

絶対、会議室にいたんだ。

探したのに見つからなかったけど、きっとどこかに隠れてて。

さすがに、メモを見た時はおもいつきり力が抜けた。

俺、何やってるんだろうつて。

でも

「俺、葉月先輩に謝りたいんですよ。嫌われたくないんです」

「嫌われたくない？」

問い返されて、頷く。

「やっちゃったのは俺ですから。謝れば、きっと許してもらえる」

「どうして、そう言い切れるんだ？」
不思議そうな声は、続く。

「だって、葉月先輩ですから。あの頃だって、俺、結構迷惑かけたけど、ちゃんと謝れば許してもらえましたもん」

田所さんは、何か呆れたように俺を見る。

その視線に、分かってもらおうとつい懸命に話し出す。

「葉月先輩は、言えば分かってくれます。きっと今、俺と話してくれないのは、何か理由があつて。でもその理由だって、多分俺の事を考えてものだと思うんです」

「 例えはあ？」

田所さんの表情は変わらない。

「例えは……俺がもうあんなに人に迷惑をかけることが無いよう分からせるためとか」

「はあ？」

「きつと俺の為です。それだけは分かります。だから俺、ちゃんと謝りたいんですよ」

さすがにここまで避けられると、ちょっと頭にくるけれどそこまで言った時、田所さんが盛大に溜息をついた。

「あー今日、あいつ逃げて正解だわ。宮下は神様が聖女様かつての。お前、そんな考えでいるんなら、会わないほうがいいよ。」

「え？」

呆気にとられて、ついぼかんと口を開ける。

「お前さ、少し自分の行動とか宮下の反応とか考えてみ？」

「そつそれはちゃんと考えて、だから」

慌てて言い返そうとした俺に、片手を上げてそれを制する。

「あの頃あの頃、ホントお前達うるさいな。非常階段でさつき、俺の言葉聞いてなかった？ あの頃はもう過去で、お前らは現在を生きてるんだぜ？ 七年間全く変わんねえ人間なんているかよ」

「そんなの分かってますよ。葉月先輩も、あの頃とは変わって」「分かってねえよ。あの頃と変わってるっついても、お前の判断基準はあの頃の二人なんだから？」

性格も容姿も変わったんだ、お前ら二人の関係も変わる事だってあんじゃねえの？」

怒ったように、田所さんは俺を見る。

俺達二人の関係……？

頭がまわらず、ただ田所さんを見ていたらむすつとしていた表情を少し和らげた。

「あの頃はあの頃。宮下と再会してからの自分を、少し考えてみるんだな。長い長い宿直、考える時間はたっぷりあるぜ」

椅子から立ち上がって、鞆を掴む。

「大体お前、山下さんの事が好きだったんだろ？ なんか宮下の話しか、聞いてねえぞ俺」

そう言うと、俺の頭を軽く叩いて部屋から出て行った。

残された俺は、PCの画面を見ながら背もたれに寄りかかる。葉月先輩と再会してからの、俺？

別にいつも通りの俺だよな。

ただ、ついあの頃を思い出して葉月先輩に甘えてた気はする。

成長した俺を見せたかったってそう先輩に言ったのに、甘えられて幻滅したとか？

山下先輩の話し聞いているのが嫌だったとか？

確かに他人の色恋話聞いているのなんて、面倒だよなあ。

でも、そんな理由であそこまで怒るかな。

先輩なら、はつきりと言いきりそうだけど。

だってあの時だって、いつも誰かに頼ってはいられないって諭されたし。

PC画面では、店舗の売り上げ報告の処理とバックアップが始まっています、これが始まると三時間くらいすることがない。

何か不具合があれば、劈くようなアラームがなる。

俺は椅子から立ち上がると、壁際においてあるソファに横になる。ちゃんとした仮眠室もあるけれど、そこに行くと仮眠どころじゃなくて本気寝しちゃいそうだから。

昔の俺なら、きつとゆったり寝れそうだな。この大きさ。

ソファの肘掛から向こう側に伸びる自分の足を見ながら、つい笑う。

あの頃ちっさいとかかわいいとか言われてて凄く悔しかったけど、人と違うっていう意味では上手く利用してたかもしれない。変な話、嫌われることなかったし。

初対面なのに、好かれることの方が多かった。

俺、葉月先輩に会えて嬉しかったんだけどなあ。

確かに大人っぽくなったけど、それでもほとんど変わらない姿にあの頃に戻ったみたいで楽しかった。

あの頃は憧れが強すぎて雲の上の存在のような感じがしたけれど、今はそうじゃない。

人として実感できる、対等な立場に思えて。

? あれ?

そこまで考えて、はたと気づく。

もしかして、俺、先輩を混乱させたのか?

葉月先輩はほとんど変わっていなかったけど、俺なんてあの頃の面影ほとんどない。

性格も、多分変わってる。

今の俺が地なんだけど、あの頃は見た目があんなだったから、ちょっと人より引いてたし。

見た目も性格も違う俺が、あの頃先輩にしてきたのとおんなじ感覚で接してたら、そりゃ面食らうよな。

あれ?

ちょっと待て。

じゃあ、逆説だ。いや逆説なのか? わかんないけどまあいいや。

俺が、葉月先輩の立場だったら。
よし、それでいこう。

まったく見た目の違う男が、高校の後輩ですくってやってきて。
あの頃と同じような感覚で接してきて。

拳句に、色恋話で酒で潰れて。

そいつを、自分の部屋まで運んで介抱して。

その翌日から、避ける

もしかして、それって……色恋話を……山下先輩の話を知りたくな
いから？

頭きたら、その場で言うよな。

ここまで私に迷惑かけるんじゃないって。

俺の為に避けてるってそう思ってたけど、そこまでまだるっこしい
こと、するかな。

それしか思いつかなかったけど、それってあの頃の二人の関係って
のが前提で。

田所さんの言うとおり、それをはずして考えると……

がばっと起き上がる。

右手で口を押さえて、ソファの背を左手で掴む。

えっ、それって

他人のじゃなくて、俺の色恋話を聞きたくなかっただけ……とか？
だから、あそこまで避ける？

ぐるぐると回りだした思考を、なんとか抑えながら頭をめぐらす。

自惚れすぎかな、そんな考え。

でも、もしそれが当たりなら、山下先輩の飲み会で二人になった時。もう話を聞いてくれる状態じゃなかった。俺が呼びかけても、振り向いてくれなくて。酒のせいかと思ってたけど、顔が真っ赤で。

その、説明……つかねえ？

もしかして、葉月先輩

俺の事、好き……だったりして？

その考えに思い至った途端、心臓が早鐘を打ち始める。顔が熱い。きつと俺、今真っ赤。

うわっ、マジで？

いや、でもそう考えるとつじつまがあつたりなんだから

あの頃と変わってるつつーても、お前の判断基準はあの頃の二人なんだろう？ 性格も容姿も変わったんだ、お前ら二人の関係も変わる事だつてあんじゃねえの？

田所さんの言葉が、脳裏に浮かぶ。

そういえば、田所さん。お前ら二人ともあの頃あの頃うるさいって言ってた。

同じようなこと、葉月先輩にも言ったのかな。
で、しかも葉月先輩も分かってない感じで……

ちょっと待て、俺は？

俺は、葉月先輩の事どう思ってるんだ？

俺、山下先輩が好きなんだよな。

なのに、飲み会以降山下先輩の事頭の隅にもなくて。
葉月先輩の事ばっか考えていて。

最初に山下先輩と会った時、葉月先輩を思い出して。
山下先輩とのやり取りが、楽しかった。

どうせ選ぶなら山下先輩のいる所って、この会社まで追いかけてきたんだ。

俺にとっては、葉月先輩は先輩で。

いきなり違うように考えろっていわれても……

でも、もし葉月先輩が誰かと付き合い出したら？
それはなんだか嫌な気がする。

「うっわ……」

机の上に置いておいた携帯が、着信音を流す。
考え込んでいた俺は慌ててとると、田所さんからのメールだった。

先輩からもう一度チャンスをやろう。明日宿直終わったら、事

業部のビルに来な。宮下に鍵返すっていつて呼び出しておいてやるから。世話やけるなあまったく。

思わず携帯を持って拝む。

助かります、田所さん！

慌ててお礼を返信して、携帯を閉じる。

ちゃんと話せば、きっと葉月先輩の考えてることも分かるはず。

ちゃんと話せば、俺が葉月先輩をどう思っているのか分かるはず。

基本楽観的な俺は、そのままソファで眠りについた。

第二十三話　そして昨日の振り出し（前書き）

第二十三話　そして昨日の振り出し

携帯の画面を見て、思わず溜息をつく。

伊吹から逃げて、追われる様に部屋に戻ってきたのが三十分前。シャワーを浴びてリビングに戻ってきたら、田所くんからメールが来ていた。

鍵返すから、明日十六時半、事業部ビルの三階な。タバコ吸う所

今日の事とか一言もなく、ただ端的に用事だけ。

伊吹に聞いたのかな、私が逃げたこと。

さすがに、田所くんも呆れたか。

携帯の閉じてソファに放り投げる。

後輩と友達と、いっぺんに失うのかな。

ソファに腰をかけて、伸びをする。

ビルを出て、駅まで歩いて。

電車に乗って頭を冷やしながら、ここまで帰ってきて。

やっと、一つの考えにたどり着いた。

ただ単に、山下さんに嫉妬してたことに。

伊吹を誰にも渡したくなかっただけ。

その口から、他の人の名前を聞きたくなかっただけ。

私の行動を、簡単に考えてみればそうだ。

飲み会の時、伊吹が隣にいる事に凄く緊張した。

それって、そう言うことだよな。

後ろめたいからじゃなくて、好きになったからドキドキしてたんだ。

先輩後輩以上の関係は、私たちにはないって思ってたのに。

でも、あの子が変わっていたからこそかもしれない。

きつと、あの頃のまま再会したら、こんな気持ちにならなかったと思う。

気づいてみれば、本当に簡単なことだった。

あんなに悩んだことが嘘みたい。

どうしてもあの頃が、ついてまわって、恋愛に頭がまわらなかった。だから、複雑に考えすぎただけ。理由が欲しくて。

それでもやっぱり踏み出せないのは、あの子が私を先輩って呼ぶから。

それを聞くと、どうしても先輩としての自分に戻る。

傷つけちゃいけないって、そればかり。

だって伊吹は山下さんが好きで。

それを知っている私に、好きって言われても、あの子が悩むだけだから。

田所くんに、話して終わりにしよう。

ここまで迷惑かけた彼には、ちゃんと気づいたことを話そう。

でも伊吹には……あの子が悩まないように、避けていた理由を何か作らなきゃ。

二人に嫌われてしまったら、仕方ない。

自分のせいだからもう諦めるしかない。

なんだか、すつきりしちゃったな。

悪いとは思っけけれど、さつき逃げておいてよかった。

ごめんね、伊吹。

寝室に向かうと、ベッドに入って眠りについた。

翌日、田所くんの指定した時間に事業部に向う。

事業部は今日から休みに入っていて、誰もいない。

ここなら、話を聞いてもらえるだろう。

怒られるなら、それでもいい。

表玄関の鍵を開けて、中に入る。

三階の廊下に電気がついていているのを見ると、すでに田所くんは非常階段から中に入っているらしい。

私は中から玄関の鍵を閉めて、階段を上がった。

一足一足、気持ちが重くなる。

覚悟を決めてきたとはいえ、苦しくなる。

何、言われるかな。

三階まで来ると、廊下の突き当たりのベンチで田所くんがタバコを吸っていた。

昨日とまるで同じシチュエーション。
ゆっくりと近づく。

「よお」

彼は私に気がつくのと、片手を上げて笑った。

怒っていると思っていていた私は、その笑顔に一瞬きよんとしてしま
った。

「どしたー？」

それに気づいたのが、吸っていたタバコを灰皿に落とし立ち上がる。

「う……うん。その、鍵、ありがとう」

何から言っているのか分からなくて、とりあえずお礼を言う。

「うん？ いや別にいいよ。この後、宿直で本社に行くから」

「そっか、仕事の前にごめんね」

立ったまま俯いていたなら、田所くんも同じように立ったまま話し出
した。

「宮下、昨日逃げたんだって？ 伊吹落ち込んでたぜー」

直球の言葉に、うっ……と言葉に詰まる。

「なんで、逃げたの？」

その言葉に、思わず拳を握り締める。

息を吸って、吐いて。

田所くんの顔を、見上げる。

「あのね。田所くんの言う通りだったみたい」

「ん？ どういう事？」

首を傾げる彼に、もう一度息を吐いて話し始める。

「昨日は、何しゃべっていいのか頭の中パニックで。悪いとは思ってたけど、隠れて逃げたの。落ち着いて、考えたかったから」

「うん」

短く相槌を打つと、先を促される。

「で、家に帰って。私ね、田所くんの言う通り伊吹のこと好きだったみたい。」

「やっと、あの頃から抜け出せた？」

苦笑い気味の田所くんの言葉に、頷く。

「客観的に見たら、私、山下さんにただ嫉妬してただけなのよね。伊吹が好きで、でも、伊吹は山下さんが好きで。今思えば、なんであんな難しく考えたのか分からないくらい」

「だから、お前は生真面目なんだよ。後輩の伊吹っていうのが前提で、それ以上の感情を持つことないって最初っから思い込んでるんだから。で？ 気づいた以上、伊吹と会うの？」

生真面目というか、融通がきかないと言っか。

そんな自分に、苦笑い。

「うん、会って謝る」

「で、とうとう告白って？」

茶化すようなその声音に、少し睨む。

「しない」

「え、なんで？」

意味分らないと、首を傾げる。

「だって、伊吹は山下さんの事が好きなんだよ？ 分かっくて、告白なんて出来ない」

「いや、山下さんは結婚したんだから関係ないじゃん」

呆れたような声。

「でも、伊吹が傷つくもの。自分の事を好きな人に、自分が好きな人の相談してたなんて」

その言葉に、首を傾げる。

「そんなんで傷つくような奴じゃねえぞ？ 伊吹は」

話し出そうとする彼の言葉を遮る。
「それに、あの子も私の事は先輩としか思ってないんだから、告白されたって困るだけ」

「はあ？」

田所くんは腰に手を置いて、盛大に溜息をつく。
少しイラついたように、眉をしかめた。

「駄目だ。 抜け出せてねえよ、まだ全然」

「え？」

吐き捨てるように言われたその言葉に、思わず彼を見上げる。
視線の先には、呆れたような怒ったような、そんな表情。

「あ、そう。じゃ、いいんだ。もう伊吹の事はいいんだな？ ただの先輩として接するって決めたわけね？」

早口でまくし立てると、ずいっと私の方に近寄った。

「え、ちょっと」

慌てて身を引こうとした私の身体を、田所くんは両腕で抱きしめる。

「やめ……っ」

手を伸ばして離れようとしても、それ以上の力で引き寄せられる。

スーツから香るタバコの臭いが、それを実感させて余計顔に血が上る。

「俺、お前の事好きだって言ったよな？ お前が伊吹の事もういいって言うなら、俺、遠慮なくお前を口説くけど？」

「はっ……離してっ」

突然、何？ なんなの、この展開はっ！

「わざわざ敵に塩送ってやったのに、あいつもしっかりしねえしよ。お人よしするの、もうやめっかー」

その時、非常階段の扉がバタンツと勢いよく開いた。

昨日と同じく、肩で息してる伊吹の姿に身体が硬直する。

「何やってんすか、田所さんっ！」

「よお伊吹。また、タイミングいーねえ」

伊吹はそのままの勢いで私達に近づくと、田所くんの腕の中から私を引き剥がした。

「なんだよ怖えーな。お前の先輩、俺が好きになっちゃいけないのかよ」

「葉月先輩は、俺の事が好きなんです！」

！？

「はっ？」

伊吹の爆弾発言に、思わず間抜けな声が出る。
言われた田所くんも、目を見開いてきよんとしてる。

伊吹は真っ赤な顔のまま、私を背中に隠して田所くんを睨み付けた。
「昨日田所さんに言われた通り、ちゃんと考えました！」

一瞬の沈黙の後。

盛大に、田所くんが笑い出す。

「お前、当人を目の前にして言うことかよ」

「え？」

振り返る伊吹と、目が合う。

きつと擬音が見えるなら、二人の後ろにはポポツとかボンツとかそんな字が躍るはず。

見る間に真っ赤になって、思わず目を逸らす。

「こつちの方が、中学生日記だ。なあ、伊吹？」

目の端に涙をためながら、やっと笑いのとまった田所くんはベンチにおいてあった靴を取り上げた。

「じゃあな、俺、仕事行くわ」

「え、田所く……っ」

この状態で、二人にするの?!

慌てて名前を呼ぶと、田所くんは少し私のほうを見てドアノブに手をかけた。

「ちゃんと、話せよ?じゃなきゃ、俺が可哀相だろ?」
そう言って笑うと、扉の向こうに消えた。

第二十四話 言っではいけない言葉

しんとした、廊下。

すぐ目の前に、伊吹の背中。

確かに、ちゃんと話そうって思ってたけど。

でも好きって事は言わないつもりで……、そのごまかそうと思って。

なのに、何？

なんで、伊吹知ってるの？

田所くんの言う通りって、いったい何話したのよ！

きっかけくれるのは嬉しいんだけど、もう少し落ち着いた状態で会わせてよあっ！

少し……少しでいいから時間くれないかなあ

落ち着かせて、私を

思わず、後ずさる。

その途端、後ろ手で腕を掴まれた。

「往生際悪いですよ、先輩。さすがに二日連続は逃がしませんって」

「は、離してっ……！」

掴まれた左腕を思い切り振ると、もう片方の腕も掴まれる。

「こんなに聞き分けなかったでしたっけ？ さすがに俺、結構頭にくてるんですけど」

見上げる伊吹の目は、知らない人を見ているみたいで怖い。

「離して」

目を逸らして俯くと、伊吹は私の身体を壁に押し付けて手を離れた。ホッとしたのも束の間、その両手が私の身体の横を通って壁につく。「ここで逃がしたら、また田所さんに笑われますからね。腕は離しましたから、逃げないで下さいよ」

掴まれているより緊張する、腕一つ分しか離れていないこの距離。

「逃げないから……、腕、下ろして欲しい」

「嫌ですね。言ったでしょ？ 俺、頭にきてるって」

ぐっと言葉に詰まる。

確かに避けまくったのは私なんだけど。

「先に、ちゃんと謝らせて下さい。山下先輩の事で潰れた時、

迷惑かけてすみませんでした」

そのままの体勢で頭を下げる伊吹。

私の目の前で、伊吹の髪が揺れる。

「俺、甘えすぎました。葉月先輩、あの頃とあまり変わりなくいてくれて、嬉しくて」

「成長してなくて、すみませんね」

つい、憎まれ口を叩く。

「ま、俺は成長しましたけどね？」

「なっ」

謝ってるんじゃないの？！

つい伊吹の顔を睨みつけると、口調と違って真剣な眼に慌てて視線を逸らす。

「すみません、俺が戸惑わせましたよね。見てくれ変わってるの自覚してたのに、あの頃の感覚ですつと接してました。今のほうが地ですけど、性格も葉月先輩の知ってる俺とはだいぶ違いますよね」

あの頃は、見てくれにあわせて人より引いてましたから。そう呟くと、少し屈んで私の顔を覗き込む。

「葉月先輩、俺の事好きでしょ」

「っ」

伊吹のさらさらした髪の毛を見ていた私は、画面いっぱいに現れたその顔に思わず右腕で自分の顔を隠す。

「知らないっ！」

身体を竦めて懸命に縮こまりながら出てきた言葉は、そんなもの。だから嫌だったのよ、落ち着いてから話したいのっ。

私、パニックになると考えて話すこと出来なくて……！

一番言っちゃいけない事を、言葉にしてしまいそうになる

！

「知らないって」

伊吹の呆れた声。

「葉月先輩、子供？」

その言葉に、かあぁと頭に血が上る。

「こっ、子供で悪かったわねっ。幻滅した？ あの頃の葉月先輩なんて、しょせんこんなものなの！ もういいじゃない、なんなのよ！ 成長した成長したって喜んで！！ 伊吹なんか」

頭の隅で、言っちゃいけないって警報が出る。分かってる。分かってるけど

「伊吹には、あの頃のままできて欲しかった！ 会わなきゃよかったのに！！」

「」

あ……

言っちゃった……

静まり返った廊下。

伊吹は、そのままの体勢で私を見つめている。
両手で顔を覆って、その視線から懸命に逃げる。

言ってしまった後悔と、分かってほしかった私の気持ち。

一人で成長しないで。

私をあの場所においていけないで。

“あの頃”は、私にとって大切な思い出。
勝手にそこから出て行かないで

思わず流れる涙が、両手を伝って零れ落ちていく。

第二十五話 辿り着く先

しばらくして。

伊吹が溜息をついた。

「俺が、先輩を“あの頃”に押し込めたんでしょうね」

幻滅された言葉が来ると思っていた私は、両手の中で眉を顰める。

「俺が“あの頃”の先輩を望んだから。先輩だって七年間で変わってるはずなのに、変わってない葉月先輩を俺が望んだから」

生真面目ってこういうことか……と伊吹が呟く。

「すみません、先輩。と、いうことで。俺、好き勝手させてもらいます」

……好き勝手……？

すみませんの次に好き勝手って言葉、続くっけ？

そんな間抜けなことを考えていたら。

「はい、すみませんね」

壁についていた手が、私の両手を掴んでグイッと顔からどかす。

「なっ……」

いきなりの事に慌てて顔を逸らそうとしたら、私の手から離れた右手に頬を押さえられた。

真っ直ぐに私を見る伊吹は、笑っているけど目が真剣。

恥ずかしくなって、顔を逸らしながら目を瞑る。

「この状況で、目を瞑るのはまずいでしょ」

目の前が一瞬陰って、その意味に気づく。
慌ててあげた私の目の前に、目を瞑る伊吹の顔と触れる唇の感覚。

「!」

あまりの事に、びっくりして固まった。

ピントの合わない画面には、伏せられた睫毛。

こんな近くで、人の顔なんて見ることはない。

「んんっ?」

そんなことをぼけつと考えていたら、柔らかい濡れたものが唇をなぞる感覚にびくりと反応する。

離されていた左手で、伊吹の胸を叩くとやっと唇を離した。

「最初っからはまずいか。ガードかたいっすね。さすがに、流されちゃくれない」
「にやりと笑う。」

「でも 流されてくださいよ、こんな時くらい」

そう言って近づいてきた顔を、左手で押し返す。

「やだっつてば、こんなの伊吹じゃないっ!」

「そりゃそうですよ。あの頃の、俺じゃない」

掴まれた左手が、壁に押し付けられて。

目の前には、伊吹の顔。

「葉月先輩も、あの頃の先輩じゃない。だって、こんなに面倒な人じゃなかったもん」

「めっ、面倒で悪かったわねっ」

止まっていた涙が、目の端に溜まる。

「俺も昨日まで半信半疑なところありましたけどね。どうしても先輩後輩って頭があつて。でも、さっき田所さんと先輩が一緒にいるの見て、やっと気づいたんですよ」

「何を？」

聞き返す私と、優しそうに笑う伊吹。

「俺、先輩の事好きです。いい加減鈍くて、悪いんですけど」

すぎ？

思わず見返す。

「だって、山下さん……。せつかく、会社まで……」

伊吹が苦笑い気味に、溜息をつく。

「あの飲み会の時、ちつとも辛くなかったんですよ。頭の中は、葉月先輩にどう謝ろうかってそんなことばかりで。なんか今思うと

」

ちらりと私を見て、目を逸らす。

「葉月先輩を追いかけたのかも、山下さんを通して。 って、

俺、変態じゃんそれ」

「確かに、変態かも」

目を細めて笑うと、目尻から涙が頬を伝った。

伊吹は指を伸ばして、その涙を拭う。

「でも、そのおかげで葉月先輩と会えましたから」

そう笑う伊吹の表情は、とても優しい。

「好きです。俺と付き合ってくれませんか？ 先輩……っつと
私を押さえていた手を離して、少し屈む。」

「葉月さん」

そう私に言う、伊吹　彼は。

“あの頃”の私たちなら。

見上げるのは、伊吹で。

見下ろすのは、私。

可愛らしい声だったのは、伊吹で。

大人びた声だったのは、私。

頼っていたのは、伊吹で。

受止めていたのは、私。

今、私の目の前にいるのは、伊吹だけど。

あの頃の伊吹じゃなくて、かこ現在の伊吹。いま

私の知らない七年間を持っている、少し大人の彼。

二人とも、思い込みが激しくて。

あの頃から離れられなくて。

でも先に抜け出せた、彼は。

私を、ちゃんと迎えに来てくれた。

一緒に、行こう

「面倒だけど、いいの？」

意地悪そうに尋ねると。

「今回の事で、嫌ってほど分かりましたよ」

溜息と、苦笑い。

少し頬を膨らませた私に、にこりと微笑むと優しく抱きしめる。

まだ、慣れないけれど。それでもこの温もりは気持ちいい。

おずおずと両手を背中に回してみたら。

「まあ、あのままの先輩だったら俺、絶対、手え出せねえもん。あ
くよかった」

「！」

一気に恥ずかしくなって、回したその両手で背中を抓って報復した。

「いてえっ」

叫ぶ伊吹を、かわいいと思ったのは秘密。

第二十六話 あ頃の君へ

「他に誰もいないからって、何してるの？」

正月の休み明け。

本社の総務に用事があって、久しぶりに二階のラウンジにお茶を飲みに行ったら。

「あれー、葉月さん。そっちこそ、なんで？」

「おう、宮下。お前も混ざる？」

伊吹と田所くんが、じゃれていた。

うん、言葉のまんま。

財布を手に背伸びする田所くんと、それを奪おうと手を伸ばす伊吹。

「まあ、身長差で既に負けてるからいいわ。大体、伊吹も無理でしょよ」

「気にしてることを、あっさりど……」

身長が伸びたとはいえ、田所くんは同世代でも背の高いがっちりした体躯の持ち主。

子供がじゃれているように見えてしまう。

伊吹は私の言葉にむすつと顔をしかめると、傍の椅子に座った。

「やりー。宮下、これで三人分の飲み物買って来て。俺、珈琲ね。こいつカフェオレ」

田所くんは手に持っていた財布を、ぽんつと私に投げた。

「誰のこれ」

一応聞きながら、ラウンジにあるカップの自動販売機にお金を入れる。

「伊吹の。俺へのお礼」

「あらま」

そのまま二人分買い終えると、トレーに載せて二人の前に置いた。

それを手に田所くんは、財布を私から受け取る伊吹に向けて意地悪く笑う。

「大体さ、あれだけ世話焼かされたのに、お礼が珈琲ってどんなもんかね」

「これでもう七杯目じゃないですか。しかも、こっちから言う前に請求された」

「あらあら」

悔しそうに田所くんを睨みつけながら、カフェオレを飲む伊吹を見て思わず笑う。

「あつ、今子供っぽいって思ったでしょう!」

「ん、思ったわよ。ねえ?」

田所くんに同意を求めると、彼は当たり前と頷く。

「最初っから俺にとっては、子供だよ。なんか、弟みたい」

その大きな手で、ぽんぽんと頭を叩く。

そのままにやりと笑って、私を見た。

「ま、いつの間にか“葉月さん”に変わってるし? 話はいいつから聞いたけど、よかったな」

「う、その節はご迷惑おかけしました」

あのと一応田所くんにはメールでお礼を言ったんだけど、直接会うのは今日がはじめて。

意識して田所くんを見ると、思わず赤くなる。

「おや? 赤くなってるよ。これって、まだ俺にも脈あり?」

「や、ちがつ……」

慌てて否定しようと手を振る。

「大丈夫です。田所さんなんか、眼中ないそうです」

「伊吹！」

代わりに言い放つ伊吹に、田所くんは軽く拳でお見舞い。

「世話になった先輩に対して、どんな言い草だ」

その時ラウンジの出入り口から、システム管理課の部長が顔を出した。

「おい、そのばか二人。どっちでもいいから、ちょっとこい」

「お前行って来い、面倒くせえ」

「え、恋人同士を引き離します?」

言い返す伊吹を、足蹴にして追い出す。

伊吹はぶつぶつ言いながら、部長の元へと急ぐ。

「ばか二人って……、凄い言われ方」

思わず噴出す私に、田所くんは笑う。

「それよりさ、抜け出せたみたいだな? なんか表情がすっきりしてるよ。いつもの宮下だ」

その言葉に、思わず彼を見る。

「いろいろと、本当にありがとう。田所くんがいなかったら、多分、こんな風にならなかった。それと……」

言うべきかどうか悩んだんだけど。

「その、ありがとう。でも、ごめんね」

田所くんは一瞬きよんとして、微笑む。

「流せないところが、お前らしいよな」

出入り口で部長と立ち話をする伊吹に、視線が向う。

「ちゃんと返事くれてありがとう。まあいいさ。俺は宮下の事が好きだけど、伊吹も気に入ってた」

何か用事を言いつけられているらしく、分厚い書類を苦笑いしながら受け取っている。

「なんかさ、俺、黒田さんの気持ちが分かった気がする。あれだけ佐々田さん大好きオーラ出してるけど、別れさせようとかそういう風に見てなくて」

黒田さんが、佐々田さんの事を好きなのは周知の事実。でも、佐々田さんは気づいていないのも皆知っている。

「あれさ、二人の間には何かあったんだよ。だから多分、黒田さんの好きは一般の好きとは違うんだろーな。きつとそれは、佐々田さんもわかってて」

田所くんはYシャツのポケットからタバコを取り出すと、口に銜えて火を点ける。

「多分俺も、おんなじ感じ。俺の場合、お前だけじゃなくて伊吹もその対象だけど。じゃなきゃ、あんなに世話やかねえよ」

「田所くん……」

話が終わったのか、伊吹が書類片手に戻ってきた。

「何この雰囲気。いい感じなのがむかつくんですが」

そのまま田所くんの前に、書類を置く。

「何これ」

伊吹の言葉を流した田所くんは、タバコを指で挟みながら眉を顰める。

「来春スタートのセレクトショップ、あれのシステム作っとけて。俺じゃなくて、田所さんの担当でしょ」

「んあー」

タバコを持っていない右手で、ぴらっと一枚めくると盛大に溜息を
ついて頭を振る。

「よろしく、伊吹」

「なんでーっ」

裏拳で突っ込む二人は、まるでコント。

部長の言う、ばか二人の意味が分かる気がする。

「葉月さん、今日、帰り何時ですか？ 俺六時あがりなんですけど
押し付けられた書類を見ない振りしながら、伊吹は何うように私を
見る。」

このやり取り、なんか恋人同士みたいだなーとか変なことを考えな
がら、五時あがりだから駅で待つてると伝える。

それを聞いていた田所くんが、ふと呟いた。

「新鮮つていやぁ新鮮だけど、伊吹が葉月先輩つて呼ばないの、な
んだか違和感あるな」

そうですか？ と首を傾げると、伊吹はにやりと私を見た。

「効果的に使うんですよ。 ほら、例えばあーいう時とか」

田所くんが何かに気がついたように、ぽんっと手を叩く。

「ああ、そーいう時ね」

「はあ？」

あーとかそーとか、何、その指示語。

意味が分からず首を傾げる。

「先輩つて言うつと、あの頃思い出してわがまま聞いてくれそうじゃ
ないですか。 いつも使つてたら、効果薄れそう」

「なるほどね。 お前、顔に似合わず策士だな」

我俣？策士？

なにそれ？

やっぱり分からず、ぼけつと二人のやり取りを聞いていたら、伊吹は右の人差し指を立てて、にやりと笑った。

「そしてそーいう時は、俺も義孝って呼んでもらうんですよ」
「確かに未だに伊吹だもんな」

それは呼びなれてるから。
なんて内心呟いていたら。

田所くんが、意地悪そうに伊吹を小突いた。

「しかしやらしーなあ、お前。どんなプレイだよ」

プ……！

その言葉に、顔が熱くなる。

「おー、やっと気づいた。顔真っ赤、みごとみごと」

面白そうに手を叩く田所くんを見て、ガタツと椅子から立ち上がる。

「こないから！ そんな時なんてこないから！！」

それだけ叫ぶと、ラウンジのドアに向けて歩き出す。

「どこの女王様だ、あれ」

と、大笑いする田所くんの声。

「ふっふっふ、それを籠絡するのが腕の見せ所ってね」
得意げに言う、伊吹の言葉。

この真昼間に、なんて話を！！

「伊吹、性格変わりすぎ！！」

歩きながら振り返りもせずにかぶと、

「こんな会話する十六歳がいたら怖いでしょ。ねえ？」
「確かに」

二人で、なぜか意思疎通。

沸騰しそうな頭をなんとか支えながら、出入口口にたどり着いた時、後ろから腕が伸びてきて、ドアを押さえられた。

「なっ」

思わずびくりと肩をすくめると、すぐ傍で伊吹の声。

「もう、逃がしませんよ。先輩」

「！」

きつと今、これ以上ない位に顔、真っ赤。

熱い……

「おい、ここにギャラリーいるぞー。あ、これもプレイの二つ？」

思わず伊吹の顎に頭突き。

「いてっ」

顔をしかめて顎を押さえる伊吹と、仁王立ちの私。

「おお、宮下の勝利」

お気楽に拍手している田所くんを、思いつきり睨み付ける。

「二人とも嫌い！！」

そう叫ぶと、ラウンジから走り出す。

「葉月さん、駅で待っていてくださいよー」

後ろから間の抜けた伊吹の声と、田所くんの笑い声。

そのまま階段を下りて、本社ビルから外に出る。
正月三が日最終日のオフィス街は、まだ休みの会社が多く人通りは少ない。

冷たい空気の中、思わず頬を押さえて立ち止まる。

少しずつ冷えていく頬と、一緒に冷めていく思考。

まさか、こうなるなんて思っても見なかった。

あの頃の、私たち。

お互い理想を、押し付けていただけなのかもしれない。

自分を慕ってくれるかわいい後輩。

理想の先輩。

その、二人はもう今はいないけど。

現在の二人が、これからを作っていく。

ねえ、あの頃の君へ

今の私をどう思いますか？

木枯らしに押されるように、事業部のビルへと歩き出す。
見上げる空は、とても澄んでいて。
冷たい空気が、頬を撫ぜる。

ねえ、あの頃の私へ
今の彼をどう思いますか？

返ってくる言葉は、ただひとつ

それはあなたが決めること

私達はずっと ” じじいのなか あの時 ” で生きていく
のだから

あの頃の君へ 了

第二十六話 あの中の君へ（後書き）

蒼井です。

ここまで御覧下さり、本当にありがとうございました。

本日、本編は最終話となります。

如何でしたでしょうか。

もしよろしければ、一言いただけるととても嬉しいです。

どうぞよろしく願います。

10月1日から、「あの中の君へ・独り言」として田所くんの話を新しく投稿したいと思います。

田所くん、一人でしゃべってます（笑

三話位の予定です。

伊吹も書こうとしたんですけど、なぜだー、かけない^^；
基本、主人公より脇役の方が好きな蒼井です。

最後まで読んでくださり、本当にありがとうございました。

追記*****

小説家になろう様のリニューアルが終了後、田所くんのお話を投稿しようと思います。

申し訳ございませんが、今しばらくお待ちくださいm・・m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6482h/>

あの頃の君へ

2010年10月14日12時00分発行